

工業高校・ 建設会社の 取組事例集

—建設業の魅力を中学生へ伝えるために—

2020



はじめに

建設業界では他産業に比べ就業者数とりわけ若年者の就業者が減っており、このままでは人手不足により持続的な社会資本の整備に影響が出るのが懸念されています。一例として、年齢階層別の建設技能労働者数データ(総務省「労務力調査」平成30年平均より推計)によると建設技能労働者数のうち高年齢者(60歳以上)は82.8万人であり、10年後には大量離職が見込まれます。一方でそれを補うべき若手入職者(29歳以下)は36.5万人と少ない状況になっています。

このような状況のもと、産業界への重要な人材供給機能を担ってきた工業高校に関して、高校側からは私立高校の無償化、保護者世代や中学校の先生の根強い普通科志向等により、生徒を集めるのが難しい状態が続いているとの声があがっています。また、建設企業側からは、工業高校の定員割れや定員数の削減などにより、数少ない工業高校生を産業間で奪い合うこととなり採用がますます難しくなっているという声が多く聞かれます。

今大切なのは、就職希望をもっている、または、建設業のやりがいなどの目的意識をもっている中学生が、自ら進んで工業高校進学を選択していく、そのきっかけづくりをどうするかではないかと考えます。工業高校の魅力発信の取り組みとともに、「建設業の魅力を中学生に伝えるために」建設産業が積極的な魅力発信をしていくことが重要です。

そこで本年度の調査においては、①工業高等学校が行う中学生への興味喚起、②建設企業が行う中学生への興味喚起、③中学校におけるキャリア教育という3つの柱で、工業高校の先生、建設会社、教育委員会等関係者の取り組みを調査し、取材を通して見えてきた課題や取り組むべき内容をまとめています。今後の人材育成や採用活動の参考としていただければ幸いです。

令和2年4月

一般財団法人建設業振興基金

C O N T E N T S

中学生・高校生と建設業の接点に関する実態調査について

調査概要	2
高校生アンケート結果概要	3

工業高等学校が行う中学生への興味喚起

—魅力発信力を高めるためのヒント事例—

Case 1 岐阜県立大垣工業高等学校	5
Case 2 岡山県立岡山工業高等学校	8
Case 3 岡山県立笠岡工業高等学校	11
Column PRポイントを明確にしたアプローチ 群馬県立前橋工業高等学校	14

建設企業が行う中学生への興味喚起

—建設業の魅力を伝える取り組み事例—

Case 1 高木建設株式会社	17
Case 2 矢作建設工業株式会社	20
Case 3 坂本土木株式会社	23
Column 人材確保・定着のヒントを探る 大幸建設株式会社	26

中学生・高校生と建設業の接点に関するアンケート結果

中学校におけるキャリア教育・職場体験の現状

キャリア教育とは?

Focus 1 教育委員会におけるキャリア教育の現状 千葉市教育委員会	38
Focus 2 公立中学校の教育現場 千葉市立大椎中学校	40
Focus 3 教員の職場体験 建設業界と教育現場の連携強化 —キャリア教育の多様化が進む今こそできる取り組み—	43
提言 中学生と建設業の接点をつくる “魅力発信の場” 拡大に向けた提言	46

まとめ	48
-----	----

中学生・高校生と 建設業の接点に関する 実態調査について

本アンケートは、中学生および工業高校生と建設業との「接点」をテーマにしたものです。人材不足が顕著になるなか、中学生や高校生へ建設業の魅力はどれほど伝わっているのか、またどのような機会を経て、それらを実感・体験しているのか調査しました。その結果概要を、ご報告いたします。詳細につきましては、P28～P35をご覧ください。

調査対象

今回ヒアリング調査を実施した工業高校を含む、宮城県1校、群馬県2校、東京都1校、岐阜県2校、岡山県1校、熊本県1校の工業高校建設系学科の1～3年生を対象とする。

調査時期

令和元年12月～令和2年1月

回答数

1,092
(内訳/1年生:396、2年生:344、3年生:352)

実施方法

対象へアンケート用紙を配布し、郵送、FAX、メール等にて回収

※図表中の「n」(Number of casesの略)は、設問に対する回答者の総数を示しており、

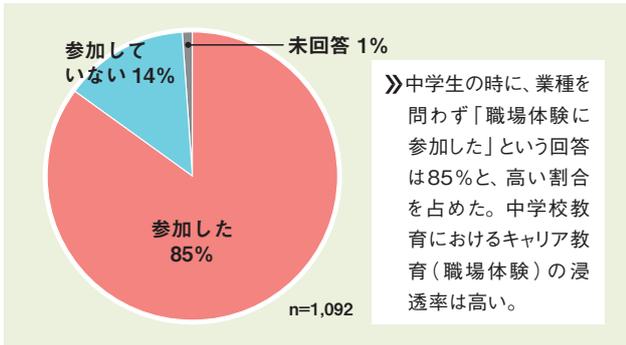
回答者の構成比(%)を算出するための基数である

※複数回答の設問においては、%の合計が100%を超える

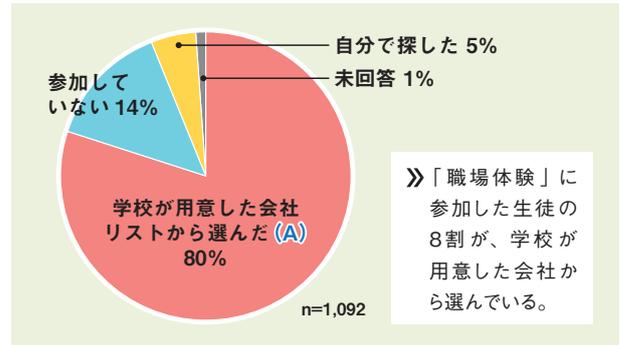
※%の比率は、小数点以下を四捨五入して表示している

中学生の“職場体験”の実態について

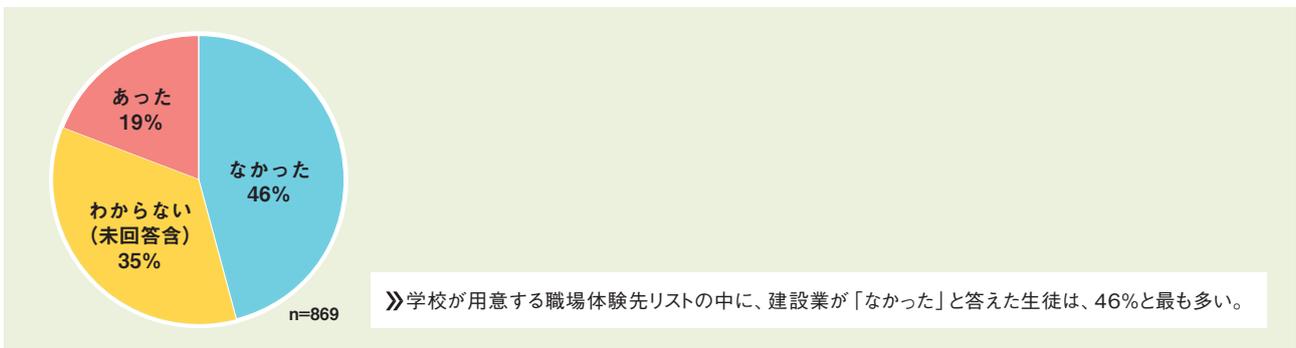
■中学生の時、「職場体験」に参加しましたか？



■中学生の時、「職場体験」先はどのように探しましたか？

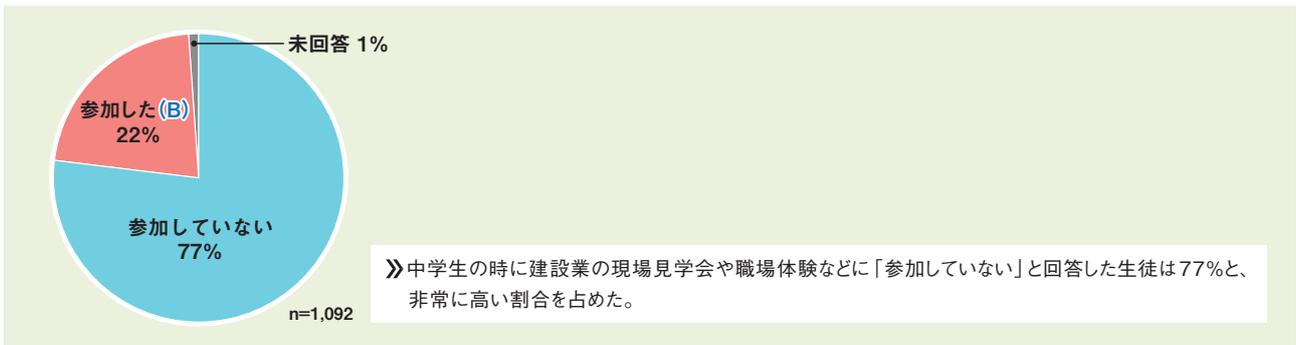


■(A)「学校が用意した会社リストから選んだ」と回答した80%の生徒に聞きました。そのリストの中に「建設業」はありましたか？

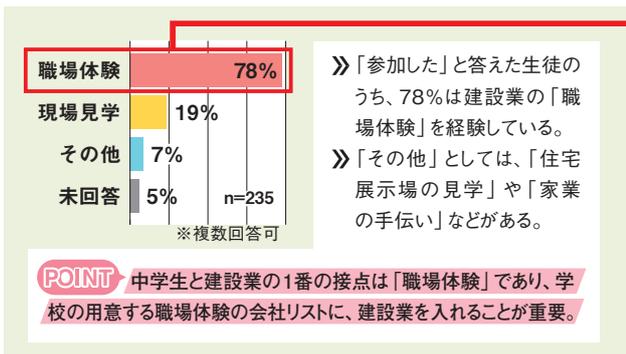


中学生と“建設業”の接点について

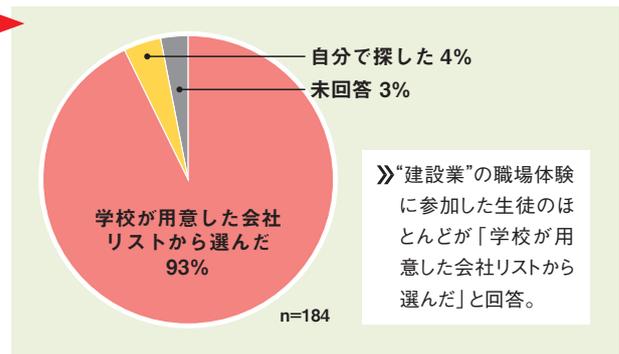
■中学生の時、“建設業”の現場見学会や職場体験等に参加しましたか？



■(B)「参加した」と回答した22%の生徒に聞きました。どのような建設業のプログラムに参加しましたか？



■“建設業”の職場体験に参加した生徒の体験先の探し方



WHO

.....
誰が

WHEN

.....
いつ

WHAT

.....
何を

FIVE
PERSPECTIVES
5つの視点

WHERE

.....
どこで

WHY

.....
なぜ

工業高等学校が行う 中学生への興味喚起

— 魅力発信力を高めるためのヒント事例 —

Case 1

岐阜県立大垣工業高等学校

学内・学外の2軸でイベントを継続的に実施
地域と連携を強め、建設業の魅力訴求に“面”で取り組む

Case 2

岡山県立岡山工業高等学校

保護者や教員に向けたPRに力を入れ、
“身近な大人”から中学生にアプローチする

Case 3

岡山県立笠岡工業高等学校

地域の“お困りごと”を解決する課題解決型学習が
保育園児のものづくりに対する憧れ心を刺激する

Column | PRポイントを明確にしたアプローチ

群馬県立前橋工業高等学校

圧倒的な設備力を活かしたアピールポイントを
「中学生・保護者・先生」3方向からアプローチ

Case 1

岐阜県立大垣工業高等学校

Ogaki Technical High School

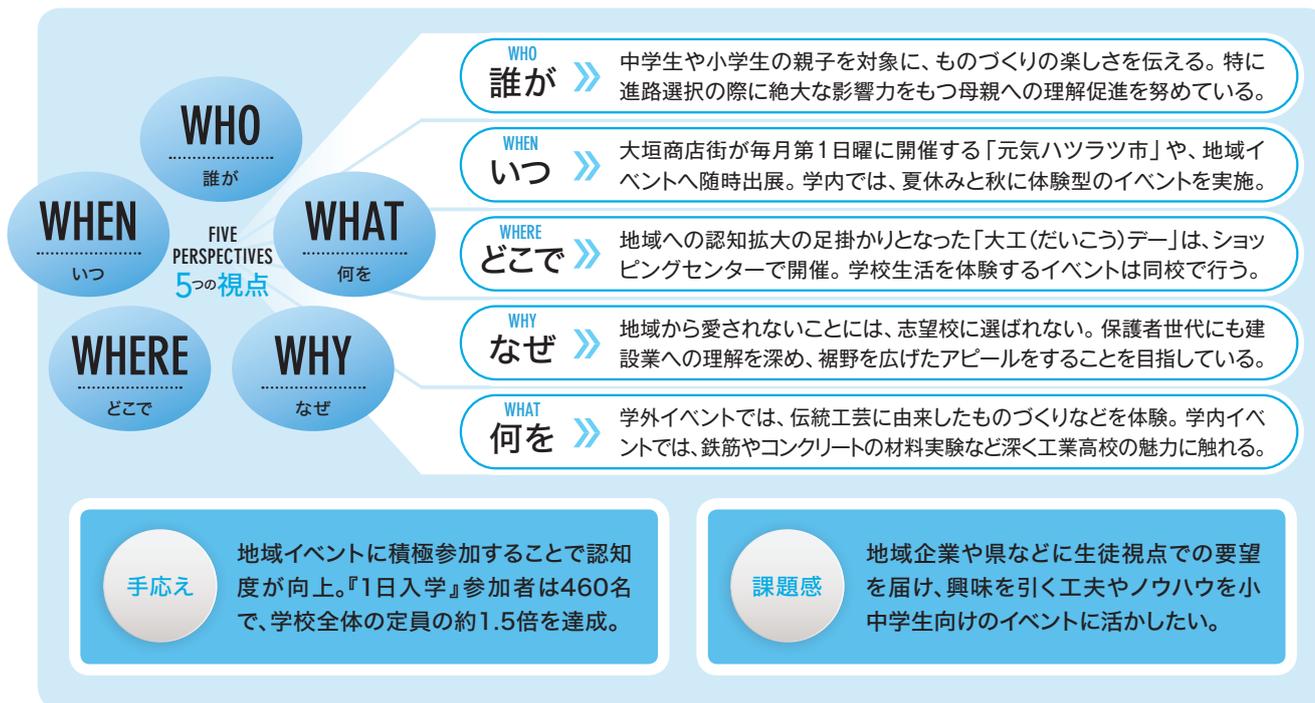
School Data

- 所在地:〒503-8521 岐阜県大垣市南若森町301-1
- 創立:1926年
- 課程:全日制課程・工業科
- 校長:森 保
- 設置学科:機械科、電子機械科、電気科、建設工学科、化学技術科、電子科、情報技術科
- 生徒数:機械科238名、電子機械科118名、電気科118名、建設工学科119名、化学技術科112名、電子科114名、情報技術科102名(3学年合計 2020年3月現在)



学内・学外の2軸でイベントを継続的に実施 地域と連携を強め、建設業の魅力訴求に“面”で取り組む

建設工学科 主任 児玉 英哉 先生



なぜ WHY / どこで WHERE

定員割れが続いた伝統校 認知拡大のために学外でイベント開催

大正15年に創立し、100年近くの伝統を誇る岐阜県立大垣工業高等学校。「大工(だいこう)」の愛称で地元で親しまれている同校は、西濃地区唯一の工業高校と

してものづくり産業を盛り上げるべく、その魅力発信に力を注いでいる。とりわけ地域を巻き込んだ取り組みを積極的に行う理由のひとつに、15年ほど前にあった定員割れがあげられる。入学志願者を増やすためには中学生はもとより、地域に向けた魅力発信が重要だと感じ、その足掛かりとして学校主催で「大工デー」を実施した。

「大工デーの役割は、『工業高校では、こんなことができますよ』というPRです。地元ショッピングセンターへ全学科の生徒で出向き、地域の方にもものづくりを体験していただきました。木材やコンクリートを使った工作や電子部品を使ったオルゴールづくりなどを通して、中学生や小学生の親子連れにもものづくりの楽しさをアピールしました」

(建設工学科 児玉英哉先生)

現在では、地域のイベントから参加を求められ、学外に顔を出す機会が増えている。

「『大工であんなことができるのなら、イベントに呼ぼう』と、次々にお声がけいただくようになりました。岐阜県大垣市が主催するものづくり体験『元気ハツラツ市』(毎月開催)や『芭蕉楽市』等の地域イベントには、年に1度は参加しています。珍しいものでは、地元企業の新社屋お披露目イベント出展もありました。当初考えた地域へのPRする場としての役割は果たせたのかなと思い、11年続いた大工デーは昨年で終了しました」(児玉先生)

地元の人にとって馴染みの深い場所にPRの場を設けたことで、中学生のみならず、地域に広く「大工」の認知を定着。その結果、自校でイベントを主催しなくても、学外でPRの場を得られるようになったのは大きな成果といえよう。

誰に TO WHOM / 何を WHAT

生徒の学びの成果に触れる「見学会」 母親に工業高校進学への理解を促す

地域との連携を密にしたイベントを行うなかで、児玉先生は保護者、特に母親の理解促進を深めたいと考えている。

「どの高校もそうだと思いますが、地域に愛されないことには志望校として選んでもらえません。当校は幸いにして歴史ある学校なので、中学生の祖父母世代からはある程度支持されています。一方で生徒の保護者世代には、“工業高校”にネガティブな先入観があるようです。進路選択には保護者、特に母親の意見は絶大ですから、そこに向けたアピールが必要だと感じています」(児玉先生)

そこで同校では、保護者にもものづくりの魅力に直接触れてもらう機会を設けている。それが『夏休み見学会』だ。「参加中学生の約3分の1は、保護者も一緒に参加しています。1～3年生が授業でつくったものを展示していますが、特に3年生が取り組む卒業設計や卒業研究などを目にする、感激される保護者も多いです」(児玉先生)

また、普通科志向が強い傾向にあるという西濃地区の、エリア性を考慮したPR内容の模索も必要だと感じている。「ものづくりをすると、完成物が立体として手元に残ります。この喜びは、普通科では日常的に味わえません。ものづくりの楽しさを感じながら技術を身につけ、自分の望む企業へ就職する、あるいは学校での経験をステップに大学に進学するなど選択肢が幅広いことは当校の

強みです。当校の場合は、工業系の有名大学の指定校推薦枠があります。将来工業系大学へ進むのならば、工業高校から進学する方法があるということも、中学生やその保護者を含めもっと強く伝えていく必要があると思っています」(児玉先生)

学外・学内の2軸で、アピールの段階を分けている同校。学外のイベントでは中学生やその保護者にいかに興味をもってもらうかを目的とし、学内イベントではより深い魅力に触れてもらう。それぞれの役割を明確にしていることが、良い効果につながっている。

いつ WHEN / 何を WHAT

中学生の印象に残すため、 インパクト大の演出で心をつかむ

毎年10月初旬の2日間、西濃地区の実業高校は一斉に、中学生を対象にした学校見学会を行っている。同校でも、午前中から夕方にかけて学校生活を体験する「1日入学」を実施。2019年開催の1日入学には、460名の中学生が集まった。そのうち、建設工学科の志望者は、定員に対し約1.3倍。地域イベントでの継続的なPRも、功を奏していると言えそうだ。その場で体験させることは、イン



「1日入学」の様子。中学生に人気が高いのは、ミニショベルカーと鉄筋の引張試験。生徒が先生役となり、中学生に説明。CADを使った間取り図作成では、演習内容から生徒が決めている



パクトが大きなものにしたいと児玉先生。「例えば、コンクリートに圧をかける材料実験。『砕けるまでにはどのくらい力が必要だと思う?』と在校生から質問を投げかけると、『1000トン!』など、中学生はそれぞれに予想を口にします。足で踏みつけるなどコンクリートの粉碎に挑戦してもらいますが、もちろん人間の力では砕けません。そこで機械で徐々に力を加え、砕いて見せます。また、鉄筋の引張試験も、毎回取り入れる体験メニューです。鉄筋を上下に引っ張り、その変化を観察します。最終的にはけたたましい音とともに鉄筋が引きちぎれますが、そのかけらに触れて硬さや質感を実感してもらっています。入学後、『1日入学で、印象に残っているものは何?』と尋ねると、この実験をあげる生徒が多いです」(児玉先生)

今までは体験授業がメインだったが、今年からは在校生と中学生の交流会を取り入れた。その狙いは、少しでも学校の雰囲気伝えること。「今回は初めてということもあり、少し盛り上がりには欠けました。来年は今年の反

省も踏まえてより良くしたいですね」(児玉先生)

好評な内容は継続的に、新たな取り組みは改良しながらより引きの強いコンテンツに。試行錯誤を重ね、中学生の印象に残るイベントをつくりあげている。

誰と WITH WHOM / 何を WHAT

学校単体では実施困難でも、地域連携でできることが拡大

地域に向けた工業高校および建設業のPRをさらに強化すべく、団体や建設業協会、地元企業と協力し、“面”としての働きかけも積極的に行っている。

例えば、県内の工業高校だけで結成された「岐阜県産業教育振興会工業教育部会」という団体での取り組み。この団体では近年、中学生に対するPRを行う流れが強まっている。

「この部会では、中学生に向けたポスター作成をしました。各中学校へ配布し、校内での掲示をお願いしています。学校独自でつくる学校案内なども同じで

すが、どれくらいの効果があるのかあまり実感がありません。そこで3、4年やったら検証しながら、高い費用対効果を導ける内容を探ろうとしています」(児玉先生)

また、岐阜県では建設業の人材確保・育成を目的とした「建設ICT人材育成センター」「ぎふ建築担い手育成支援センター」を擁している。同校では、それぞれのセンターで行っている魅力発信の取り組みを活かして、生徒たちの建設業に対するイメージアップを図ろうとしている。

「2019年には、建設ICT人材育成センターの企画で建設業者6社ほどに來校いただき、1年生を対象にイベントを実施しました。様々な年代の業者さんと座談会をしたり、『建設業のイメージを書いてみて!』と模造紙を使ってワークをしたり。生徒たちは『建設業=暑い』というイメージが強かったようですが、空調服の効果など具体的な話を聞き、土木を中心に現場環境が良くなっていることを知るいい機会となりました」(児玉先生)

学校と業界が“面”となり取り組む活動が、じわりじわりと効果を広げている。



今の小中学生が興味を引きそうなこととは？ 教育現場の視点から、県や建設業協会に アイデア提案も

県と連携した取り組みをしていると、「なんとか人材が欲しい」と各所から声が上がります。とはいえ、同校だけでは定員が40名と決まっているため限界がある。児玉先生は、「この枠を超えて、業界に興味をもつ層を広げることが重要」と、企業や建設業協会に様々なアイデアを提案。各所と協力して小中学生に興味をもってもらえるよう工夫をしたいと考えている。

「私たちは生徒を間近で見ているので、『こ

ういうことに興味をもつだろうな』ということがわかります。例えば、ドローンを飛ばして測量したものが、3Dになってパソコンの画面に出てくると、小中学生はゲームにワクワクするのと同じような感覚で興味をもってくれるのではないのでしょうか。また近年では、単なる現場見学ではなく、最新技術の体験と会社の仕組みを説明する場を融合したようなものが効果的なのではないかと考えています。最新技術が活躍する場面を体感



建設工学科 主任 児玉 英哉先生

し、会社とはどういったものかを聞くことで、生徒たちは社会に一步踏み出した気持ちになり、『しっかりしなければ!』という気持ちが芽生えるようです。また、現場が動いてないときでも実施が可能になるという利点もあります」(児玉先生)

企業と協力してより業界をイメージしやすい試みを行い、生徒たちの興味を深める。地域の業界関係者が一体となった“面”としての取り組みが実を結ぶことを期待する。

Case 2

岡山県立岡山工業高等学校

Okayama Technical High School

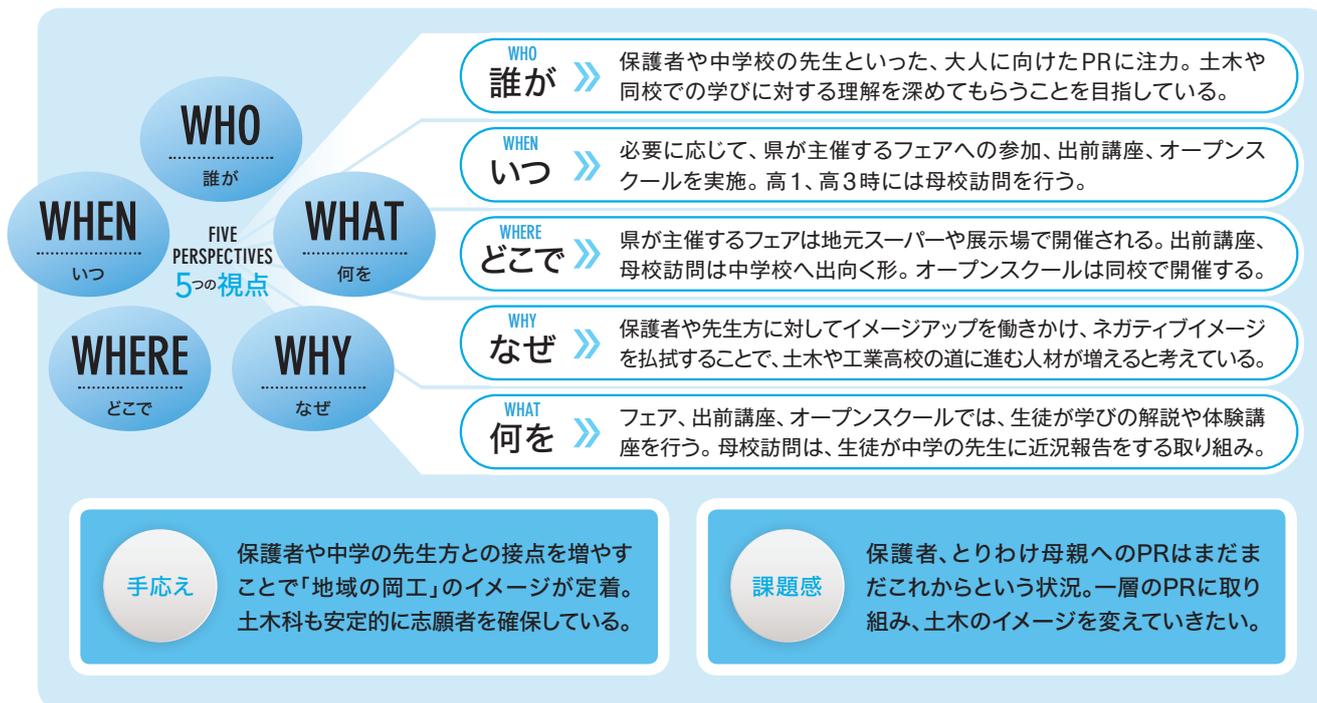
School Data

- 所在地:〒700-0013 岡山県岡山市北区伊福町4丁目3番92号
- 創立:1901年
- 課程:全日制課程・工業科
- 校長:文谷 元信
- 設置学科:機械科、土木科、化学工学科、デザイン科、建築科、情報技術科、電気科
- 生徒数:機械科239名、土木科120名、化学工学科119名、デザイン科120名、建築科120名、情報技術科118名、電気科120名(3学年合計 2019年10月現在)



保護者や教員に向けたPRに力を入れ、 “身近な大人”から中学生にアプローチする

土木科 科長 春田 正一 先生 / 西 明彦 先生



誰に TO WHOM / なぜ WHY / 何を WHAT

保護者に向けたPRで 土木に対するイメージを変える

岡山県立岡山工業高等学校は、創立118年の歴史を誇る伝統校だ。1901年(明治34年)に県下初の工業高校として設立され、これまでに約3万人の卒業生を

送り出してきた。卒業生のなかには、特急列車つばめのデザインを手掛けた工業デザイナー・三戸岡鋭治氏や、漫画家・イラストレーターとして活躍する寺田克也氏の名前もある。土木科は同校創設時に設置された、特に歴史の長い学科だという。

そんな同校土木科が積極的に行っているのが、保護者に向けたPR活動だ。とりわ

け、小中学生の母親に対するアプローチに力を入れている。

「土木科の志望者を増やすには、まず、母親たちの土木に対するイメージを変えなければならないと考えています。父親は土木や建築といった建設業に対する“仕事としての具体的なイメージ”を持っていることが多いように思います。どのようなことをして

いるのか、どんな仕事なのか、なんとなく理解して、子どもが『土木に進みたい』と言ったときに理解を示すケースが多いと思います。一方で母親は、土木や建築といった建設業をよく知らないことも多い。キツイ、汚い、危険という印象が先行し、建設業系の進学に反対してしまうということもあるように感じています。そのため、これからは母親向けのPR活動も大切であると考えています」

こう語るのは土木科で教鞭を執る春田正一先生。近年、同校では、岡山県と地元建設業協会が実施しているフェア「建設わくわくパーク」に積極的に参加するようにしているという。「建設わくわくパーク」とは、大型スーパーなどにショベルカーやローラーカーなどのいわゆる“動く車”を持ち込んで、主に母親と子どもを対象に気軽に遊んでもらえるようなイベント。フェアの会場にブースを出して、生徒たちが、工業高校での学びについて解説している。「開催に県が関わっていることで、保護者は安心して参加することができるようです。岡工のブースでは、私たち教員が話すのではなく、生徒が子どもたちに教えるようにしています。場合によっては、体験してもらおうこともあります。コンクリートでペーパーウェイトをつくるなどのワークショップを行うこともありますよ」

こう話す春田先生。ワークショップを行う際は、特に“記憶に残るような体験を提供

すること”を心掛けているという。

「機械、電気のように、インパクトが強く、動くものは印象に残りやすい。しかし、土木の場合は派手でわかりやすい体験をしてもらうのが難しいんですよね。大きいものは持ち込めませんし、つくって動くものを見せられるわけでもありません。そのため、せめて持ち帰って使えるものをつくってもらいたいなと思いました。ペーパーウェイトなら、自宅に持ち帰って、机の上に置いて、勉強がてら見ってもらうことができます。題材探しについては、試行錯誤の連続です」(春田先生)

また、学校独自の取り組みとして、近隣の小学校に出向いて学びの紹介やワークショップを行う出前講座も行っている。フェアへの積極的な参加や出前講座によって“地域貢献の岡工”という印象が広がり、母親をはじめとする保護者のイメージも変わりつつあるようだ。

誰に TO WHOM / なぜ WHY / 何を WHAT

中学の先生に向けた母校訪問と印象深いオープンスクール

もうひとつ、同校が力を入れているのが、中学校の先生に向けた取り組みだ。高校1年の夏休みと高校3年の春休みに生徒を母校に出向かせて、土木科でどのようなことを学んでいるか、どんな会社に就職が決まったかなどを話してもらうのだという。

生徒が訪問した際にもらってくる先生の



土木科 科長 春田 正一先生

名刺には、「元気そうにがんばっているようで安心しました」「これからもよろしくお願いします」などの心温まるメッセージが書かれていることも。自分が指導した生徒が高1の夏休みに戻ってきて近況報告してくれるというのは、先生にとっても嬉しいもの。また、高3時にも訪問することで、高校でどのように成長したか、どんな会社に就職が決まったか、といった変化や出口の部分まで見てもらうことができる。

「中学の先生に、生徒が楽しく学んでいる様子や成長したところを見ってもらうことで、『岡工もありだな』と思っていただけると良いなと思っています。工業高校の学びについて知っていただけたところもメリット。中学の先生のなかには、恐らく、『建築と土木がどう違うのかもよくわからない』という方がいらっしゃるんじゃないかと思えます。そういう先生に対して、生徒目線で、学科の違いや学びの面白さを知ってもらうことができ、いいアピールの場になっていると感じています」(春田先生)



中学3年生とその保護者を対象としたオープンスクールは2日間開催。中学校が所在する地区ごとに日程を指定することで、参加人数を調整。参加者みんなが、十分に体験できるよう配慮している



中学2、3年生を対象に実施しているオープンスクールも好評だ。2019年7月に開催したオープンスクールには、約900名の中学3年生が集まったという。土木科で行ったのはCAD体験。土木研究同好会に所属する生徒たちが先生役を務め、CADで簡単な線を引く工程に取り組んだ。「教えるのが生徒ということもあり、距離が近く気兼ねすることなく話しやすかったようです。CAD体験をしながら学校生活について、いろいろやりとりしていました。『宿題が多い』『部活の練習がキツイ』など、割とストレートに話しているようでした。女子に対しては『男前が多い』なんて説明をして

いることも。生徒なりにいろいろ考えてアピールしていたようです」

こう話すのは、春田先生と同じく土木科の西明彦先生。「中学2年生に対しては“鉄筋の引張試験”など、音で驚かせるような実験を見せている」と続ける。「他にコンクリートの圧縮強度試験や測量実験もしています。フェアや出前講座と同じく、『いかに印象に残る体験をしてもらうか』を意識しています」(西先生)

オープンスクールでの印象深い体験や解説を通して、土木について理解を深めている。こういった母校訪問やオープンスクールなどの地道なPR活動が、着実に受験者の確保につながっていると言えそうだ。

手応え／課題感

PTAからの要請も！ 「地域の岡工」として定着

「母親の意識を変えなければならない」という使命感と危機感をもって始めたフェアへの参加は、成果を実感できるまでにもう少し時間が必要だと感じているもの。一方

で、出前講座・母校訪問・オープンスクールでは、その効果や反響を実感することが多いという。

「出前講座は保護者の方から好評で、中学のPTAから『来てほしい』と要請を受けることもよくあります。同様に母校訪問も、中学から派遣依頼がきています。好意的に受け止めていただき、感謝しています」(春田先生)

「オープンスクールに参加した中学生から『道路、トンネル、鉄道、水道といったものが、土木でつくられているのだとわかった』などの熱いコメントをもらうことも多いです。在校生にも『オープンスクールに参加した』『鉄筋の引張試験が印象的だった』という生徒が多く、土木への理解や、受験・入学につながっていると感じています」(西先生)

広報企画室が中心となり、保護者・先生向けのPRに力を入れている同校。並行して中学生向けのPRを行うことで、“地域の岡工”のイメージを定着させ、毎年、安定的に、受験者・入学者を集めている。



土木科 西明彦先生



土木への興味を仕事につなげる 「岡山道路パトロール隊」の取り組み

フェアへの参加やオープンスクールなどで積極的に“土木の魅力”を発信している同校が、次なる施策として注力しているのが「岡山道路パトロール隊」の取り組みだ。

岡山道路パトロール隊は、3年生の課題研究の時間を使い、実際に道路などの点検を行う体験型プログラム。国土交通省にフィールドを提供してもらい、国土交通省や維持保守会社などからの講義を受け、十分な事前学習や危険予知活動を行った上で点検活動を行っているという。

「岡山道路パトロール隊は、2017年に岡工が小さく始めた活動です。それが広がって、2018年度には、岡工の生徒6名のほか、県内ふたつの工業高校から、合計21名の生徒が参加しました。学校近隣の国道など1～4km程度のルートを3～6名でパトロールし、年間で約180件の異常を発見・報告しています。未来の土木技術者を発掘するプロジェクトとして、新聞やテレビでも大きく取り上げていただきました」

こう話すのは、この活動を牽引している



岡山道路パトロール隊のメンバー

土木科の狩屋雅之先生。その後、同校からの参加者6名のうち5名が土木関連の仕事に就いたことで、「大きな手応えを感じた」と振り返る。

今後は地域の子供や保護者などと連携した活動にしていく計画だ。また、全国の土木を学ぶ高校生に取り組みを広げてゆきたいと考えている。土木をより身近に、親しみやすく。これからも、岡工の情報発信は続いていく。

Case 3

岡山県立笠岡工業高等学校

Kasaoka Technical High School

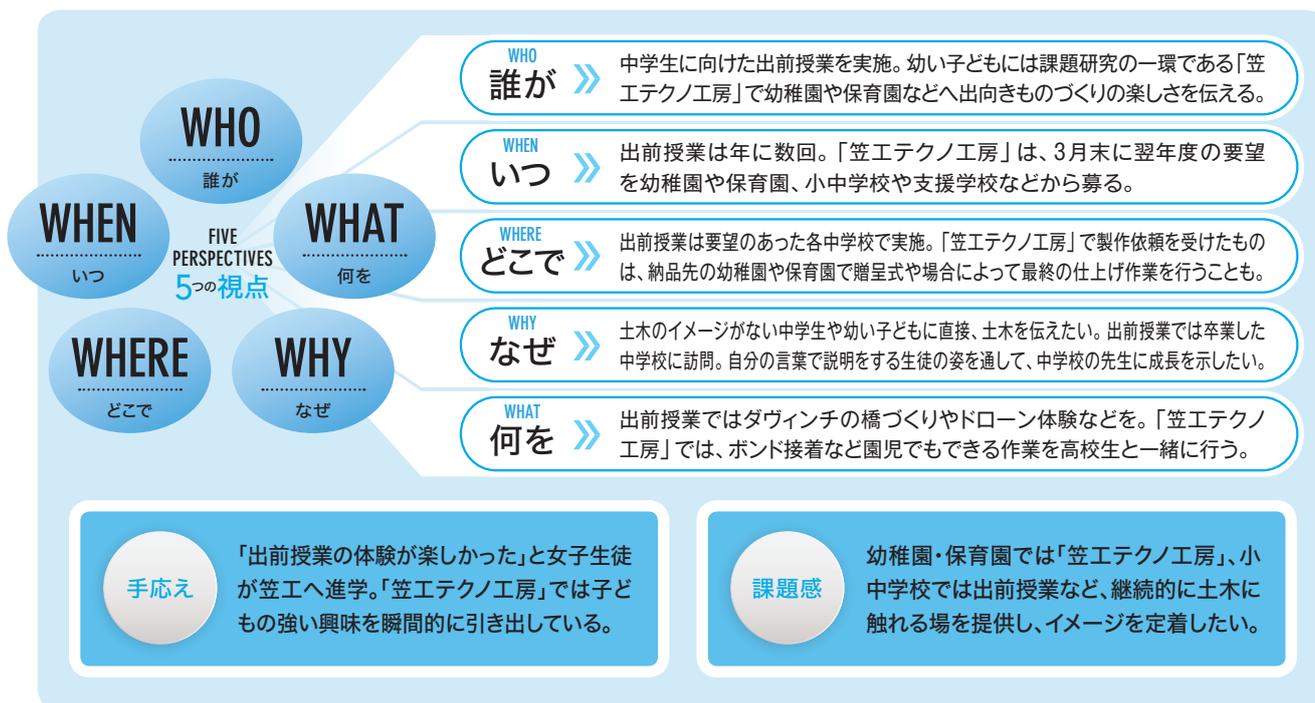
School Data

- 所在地:〒714-0043 岡山県笠岡市横島808
- 創立:1944年
- 課程:全日制課程・工業科
- 校長:横田 寿弘
- 設置学科:電子機械科、電気情報科、環境土木科
- 生徒数:電子機械科152名、電気情報科115名、環境土木科99名(3学年合計 2020年2月現在)



地域の“お困りごと”を解決する課題解決型学習が 保育園児のものづくりに対する憧れ心を刺激する

環境土木科 山本 茂樹 先生



何を WHAT

通学エリア内の中学卒業生数減に直面も、出前授業など地道に行い定員確保を実現

備西地域唯一の県立工業高校として、75年の歴史を刻む岡山県立笠岡工業高等学校。国の天然記念物であるカブトガニ

が生息する笠岡湾に近いこともあり、「環境にやさしいものづくり」を重視している。

同校で土木科が設置されたのは、昭和38年。平成19年度から土木科を環境土木科に改編した。また、学習指導要領の改訂を機に、平成30年度からは地域と連携した取り組みに重きを置いた教育課程へと再編。「地域のお役に立てる人財の育成」

を目指し、地域と協力しながら生徒が自ら考える力を養う授業や実習を推進している。

近年、同校の通学エリア内である井笠地区では、中学校卒業生数が減少。その影響もあり、入学志望者の確保は決して容易とは言えない。しかし、そんななかにもありながらも、同校環境土木科の平成31年4月入学者は、定員の40名を確保。うち女

生徒は4名と、3学年の中で最も多い。その要因について、「年に5回ほど行っている中学校での出前授業で、ダイレクトに学校や土木の魅力を伝えることができたのではないかと、環境土木科で教鞭を執る山本茂樹先生は言う。

「出前授業では、3つの体験メニューを用意しています。ひとつは釘を使わず、材料の自重と摩擦力で形づくる“ダヴィンチの橋”づくり体験。割り箸のような端材でつくりますが、『釘もボンドも使わず、橋が木材だけでつくれると思わなかった!』と、ものづくりの楽しさを実感しているようです。あとは、ドローンやトータルステーションを使った測量の体験をしています。出前授業後のアンケートを見ると、ドローン体験が、一番人気が高いですね」(山本先生)

また、中学生はもちろん保護者にも「土木はこんなに面白いんだ」ということを伝えたいという想いから、山本先生は学校ホームページ内のブログにコンスタントな情報アップを欠かさない。

「生徒たちが現場見学会へ行った様子など、知っていただきたい情報が出てきたら頻繁に更新しています。先日も、3次元測量ができる機械を体験している様子など、写真に解説を添えて紹介しました。こういった情報の発信に関しては、『見ている人は

見ているから、熱いうちに打て!』と肝に銘じて、すぐに更新するように心がけています」(山本先生)

1年生には、「出前授業の体験が楽しかったから『笠工』を選んだ」という女子生徒もいる。こういった地道な取り組みの積み重ねが、実を結び始めている。

誰に TO WHOM / 何を WHAT

課題解決型の課題研究の時間を活用し、幼児にもものづくりの楽しさを伝えたい

また、地域と連携した学びを重視する同校は授業を通して、中学生以下の幼い子どもにも、ものづくりの楽しさを伝えている。それが、平成29年度から課題研究の授業内に立ち上げられた、バーチャル工房「笠工テクノ工房」だ。

「笠工テクノ工房とは、いわゆる課題解決型学習(PBL)の手法を取り入れた学びの場です。地域の幼稚園や保育園、小中学校、特別支援学校、笠岡市などから『何かお困りごとはないですか?』と要望を募り、その依頼にお応えするものです。テーブルやいす、棚などは環境土木科で、イノシシ捕獲機などは電子機械科、BDスイッチなどは電気情報科と、各科で分担、または連携し

て、主にもものづくりをして“納品”します。場合によっては笠岡湾の環境に関する依頼もあります。環境土木科では、水質を浄化する種子植物であり、指標生物でもあるアマモが、どれくらい生息しているか、ドローンを使って面積計測するなど行いました」(山本先生)

ものづくり系の依頼については、完成物を納品するのと同時に、ものづくりや、道具をカッコよく使う“工業高校のお兄ちゃん、お姉ちゃん”に憧れや興味をもってもらうきっかけにしたい。そこで、「保育園から依頼を受けたテーブルといすの贈呈式では、あえてすべてを完成させずに製作物を持ち込みました」という山本先生。

「園児たちの目の前で組み立て、研磨をして仕上げました。途中、『お兄ちゃん、お姉ちゃんと一緒にやってみたい人!』と声をかけると、あちらこちらから元気な声が上がります。高校生と一緒に一生懸命にハンマーを使ってダボを打ち込む表情は、真剣そのもの。中には、準備をしているときから『僕もやる!』と、材木運びを手伝ってくれた園児もいました」(山本先生)

さらにこの取り組みは後日、笠岡市生涯学習フェスティバル(主催:笠岡市教育委員会生涯学習課)にて発表。さらに多くの人に、同校の取り組みやものづくりの魅力を発信し



「笠工テクノ工房」で、富岡保育園に贈呈式で訪れた際の様子。どんな作業をしているのか、園児にも分かるように説明したり、ハンマーを使った作業もけがをしないようにサポートしたり



環境土木科 山本 茂樹先生

た。加えて同イベントの小学生向け体験ブースには、ダヴィンチの橋づくり体験で参加。環境土木科テクノ工房の生徒が、小学生にも理解できるよう橋の作り方を説明。「小学4年生の男の子は、材料を切って組み立てるまでをひとりやり切りました。そばで手を出さずに見守っておられたお母さんも素敵でした」(山本先生)

本来ならば生徒のコミュニケーション力や課題発見力を育成することが主目的である学習の場。これと、子どもたちや地域へ建設業や工業高校の魅力を発信する機会とが、うまく融合した事例と言えるだろう。

なぜ WHY

園児の前で仕上げ作業をすることを希望 笠エテクノ工房へ依頼側の狙いとは

一方で、笠エテクノ工房に依頼をする側は、どのようなことを期待していたのだろうか。園庭で使うテーブルといすの製作を依頼した社会福祉法人 伸成会 富岡保育園 副園長の村上太志先生は、「高校生は、園児が自分で想像できる一番近い未来。子どもたちの憧れの存在として、かっこいい姿を見せてほしい」という。

「そのために贈呈式では、園児の目の前でつくる工程を設けてほしいと山本先生にお願いしました。子どもたちにとって私たち大人は、いろいろなことができて当然な存在。しかし高校生は、大人と子どもとの中間の存在です。少し自分たちに近い存在である高校生の“お兄ちゃん、お姉ちゃん”が、ドリルやペンチなどといった専門的な工具を使って作業する姿は、かっこよくて憧れるのだと思います。きっと、園児たちが自分の未来を思い描くとき、彼らの姿はひとつの材料になるのではないで

しょうか。実際に、ものができ上がっていく様子に釘づけの子もいましたし、最後までずっと観察している子もいました」(村上先生)

途中、高校生と園児が協同作業でテーブルを仕上げる場面があった。その様子を見た村上先生は、「代表者2名しか体験できませんでしたが、みんな本当はやりたいのではないかと思います。恥ずかしがり屋で、最初は積極的になれない子もいます。そういう子のためにも、もっとつくる過程を見ることができれば良いと思います。私は打合せも兼ねて笠工へ出かけているので、実習室で製作過程を見学していますが、園児を高校へ連れて行けないですからね。残念ではありますが、最後の仕上げ作業だけでも…というところで、山本先生に願いを汲んでいただきました」という。

目の前でつくられたものに触れた園児たちは、「木のおいがする!」「すべすべして!」「おまごどにしたい!」と口々に喜びの声を発する。こういった経験を幼い頃から積み重ねることができれば、ものづくりの仕事に憧れる若年層を増やすことができるのかもしれない。



「笠エテクノ工房」での取り組みを経て、 高校生が学んだこと、思うこととは？

課題解決型学習として行う笠エテクノ工房は、依頼先との打ち合わせのポイント取りから、工程表作成、進捗管理など、基本的にはすべて生徒が主体で行う。生徒たちに任せられ自由度が高い分、責任も大きくなる。教員から指示を仰ぎ作業を進めるのではなく、すべきことを自分たちで見つけなければならぬので気づきや学びも多い。「僕は高校生ですが、富岡保育園から依頼があったテーブルは、保育園児の気持ちになって考えました。角がとがっていたらぶつかっ

たとき痛いかなとか、お友だちとの距離が近いほうが遊びやすいだろうから、天板は直線ではなく体がすっぽりはまるような曲線にしたらどうかとか。自分とは違う立場の気持ちを考えることで、広い視野をもって物事にあたる力が身についたと思います」(男子生徒A)

試行錯誤しながらつくったものを贈呈し、「緊張したけど、子どもたちが喜んでる姿を見て、やって良かったと思いました」(女子生徒)、「地域の人が求めているものをつくることに携わり、地域貢献をしたという喜び

や達成感を味わいました」(男子生徒A)などと生徒たちは感想を語る。

今後、彼らの進路は、県内企業だけでなく、関西や中国地方の建設業に就職する生徒の他にも、大学に進学し建築学を学び1級建築士を目指す生徒など様々だ。しかし、みな一様にものづくりに携わることを目指している。笠エテクノ工房で、使う人の喜ぶ姿を目の当たりにした経験は、今後建設業で仕事をする上で、きっと役に立っていくのだろう。

圧倒的な設備力を活かしたアピールポイントを「中学生・保護者・先生」3方向からアプローチ

建築科 学科主任 金子 哲也 先生 / 土木科 学科主任 宮下 清 先生

群馬県立前橋工業高等学校

Maebashi Technical High School

School Data

- 所在地:〒371-0006 群馬県前橋市石関町137番地1
- 設置学科:(全日制)機械科、電子機械科、電気科、電子科、建築科、土木科(定時制)機械科、建築科
- 創立:1923年
- 生徒数:(全日制)機械科239名、電子機械科120名、電気科116名、電子科117名、建築科119名、土木科120名(定時制)機械科49名、建築科34名(3学年合計 2019年5月現在)
- 課程:全日制・定時制
- 校長:中西 信之

中学生へのアピールポイントは「実習」と「部活動」

大正12年に創立以来、群馬県の工業教育の中心的な役割を果たしている群馬県立前橋工業高等学校。平成16年に現在地である石関町に移転したことを機に、教育内容と教育施設を一新。校舎は、「環境に配慮した工業技術者の育成を目指そう」をコンセプトに、バリアフリー構造になっていたり、天井の配管が見えていたり。生徒の工業や環境に対する認識があがるよう、様々な工夫が施されている。加えて、GNSS測量機や電子平板測量機、水理実験装置など、設備に関しても種類・量ともに充実。様々な実験・実習を学内で行えるのは、同校の強みである。

また同校は、「資格の前工」と称されるほど資格取得が盛ん。就職や進学などに向け、自分に必要な資格の取得を目指し励んでいる。一方で、運動部活動の活躍も目覚ましい。甲子園出場経験もあり、埼玉西武ライオンズゼネラルマネージャー・渡辺久信氏を輩出した硬式野球部をはじめ、新体操部、空手道部、自転車競技部は、全国大会で上位に名を連ねる常連



土木科 宮下 清先生

校。強豪校でスポーツに打ち込みたいと同校へ進学を志望する生徒も多い。

自慢の設備を活用した“実習”と、全国的活躍をみせる“部活動”は、同校の大きなアピールポイントだという土木科の宮下清先生。しかし、実習についてはアピールが中学生へ行き届いていないと感じているという。

「工業高校には、実習があるということを知らない中学生が圧倒的に多いようです。でも実際にやってみると、教科書に線を引いたりノートを取ったりするだけの授業とは違い、楽しいということに気づきます。それを何とかPRする道はないかと、考えています」(宮下先生)



建築科 金子 哲也先生

実習の楽しさを中学校で模擬体験ゲーム形式の測量が好評の「出前授業」

実習の楽しさを伝えるために、同校で4年ほど前から行っているのが「出前授業」だ。中学校から要請があれば出向き、各科で担当を持ち回りながら学校説明会や体験学習を実施している。

「土木科で担当したときには、トータルステーションを何台か持ち込み、機材を触ってもらって体験をしました。天候の影響を受けないよう、体育館内にトータルステーションをセット。『10mだと思つところに印をつけてください』と、中学生に付箋を渡して印をつ

けてもらいます。『実際に測ってみましょう』と機械のボタンを押してもらい、答え合わせをします。ゲーム感覚で行っているので、中学生には非常に好評です。楽しんで機械を触ってくれているようなので、『ぜひ前工を受験してください』と伝えています」(宮下先生)

現状、中学校からの要請数はあまり多くはない。しかし、「出前授業を行った中学校から同校を受験する生徒は増えている」と、出前授業を実施する手応えは感じている。

保護者も参加する「学校説明会」 保護者の関心は進路情報

アピールポイントのひとつである“実習”を下支えするのは、なんといっても設備力。75,000㎡の広大な敷地に口の字型に配された校舎や大小様々な機械。同じく“部活”を下支えするのは、インターハイ会場としても使用されるほど整備され天然芝が美しいグラウンド。それらの魅力は、その場に行かなければ伝わらない。そこで同校では8月に、中学生を対象にした「学校説明会」を開催。毎年、1,000名ほどの中学生と保護者が、県内全域から集まっている。機械系、電気系、建設系の3つのコースに分かれて見学を行うが、建設系の見学を希望するのは約350名。建築科・

土木科ともに学校説明会の印象を残す工夫として、科独自のパンフレットを作成している。それぞれの科の特徴はもちろん、卒業生の進路先やコンテストの出場実績、取得資格などを記載。インターンシップや実習など、文字だけでは内容が想像しにくいものに関しては、写真をふんだんに使用し紹介しているので、中学生にもわかりやすい内容だ。

また、学校説明会にともに参加する保護者は、どのような情報を求めているのだろうか。

「最も気にされているのは、『進路』に関する事です。どのような方面に就職しているか、どのような大学に進学しているかをまとめた資料について、よくご質問をいただきます。当校にいただく求人は、大学に進学しなくても技術職やメーカーなどの研究職に就けるようなものも少なくありません。一生懸命頑張れば、工業高校から研究職に就けるという点は、保護者に対するアピールポイントになります。『それなら、前工への進学も考えてみよう』と言っています」(宮下先生)

中学生と保護者、それぞれが求めている情報を的確に提供している。また、8月の学校説明会に参加できなかった生徒のために、10月には部活動を中心に見学ができる学校説明会を開催。中学生が前工

に触れる機会を、できる限り多く用意している。

進路指導開始前の6月に実施 「中学校の先生向け説明会」

アピールポイントを明確にしなが、中学生や保護者へPRする機会をコンスタントに設けている同校。しかし、「中学生に魅力が伝わるだけでは不十分」と、建築科の金子哲也先生はいう。そこで15年ほど前から同校で行っているのが、「中学校の先生向けの説明会」だ。中学校で進路指導がスタートする前、6月に実施している。県下各中学校に案内を出し、およそ20校から参加。平日の授業の様子を見学してもらう。

「まずは20～30分程度にまとめた学校の概要ビデオの上映と、進路や実習内容を説明します。それから実習の様子を見学していただきます。生徒たちには、中学校の先生の訪問があることを伝えていまして、普段の生徒たちの姿に触れることができると思います」(金子先生)

生徒たちが頑張っていることは、十分に感じてもらっているのではないかと金子先生。これが進路指導を通し、中学校の先生から中学生にうまく伝わることを願っている。



建築科のコンピュータ実習。充実の台数でじっくり学べる環境



建築科による学校開放講座の様子



土木科の水理実験装置



土木科の学校説明会。中学生とその保護者が先生の説明を熱心に聞く

WHO

.....
誰が

WHEN

.....
いつ

FIVE
PERSPECTIVES
5つの視点

WHAT

.....
何を

WHERE

.....
どこで

WHY

.....
なぜ

建設企業が行う 中学生への興味喚起

—建設業の魅力を伝える取り組み事例—

Case 1

高木建設株式会社

中学時の職場体験でインパクトを使いベンチを設置
“カッコいい体験”の記憶が、土木への興味をかき立てる

Case 2

矢作建設工業株式会社

中学生の印象に残るのは“話”よりも“体験”
職業体験を通し、本気で挑戦することの大切さを刻みこむ

Case 3

坂本土木工業株式会社

「地元には仕事がある」中学時に体験した建設業の記憶が
流出した若者が地元・神岡に戻る際の足掛かりに

Column | 人材確保・定着のヒントを探る

大幸建設株式会社

人材確保で大切なのは「採用」と「定着」
離職させないための、「働かせ方改革」を推進

Case 1

高木建設株式会社

Takagi Construction Co.,Ltd.

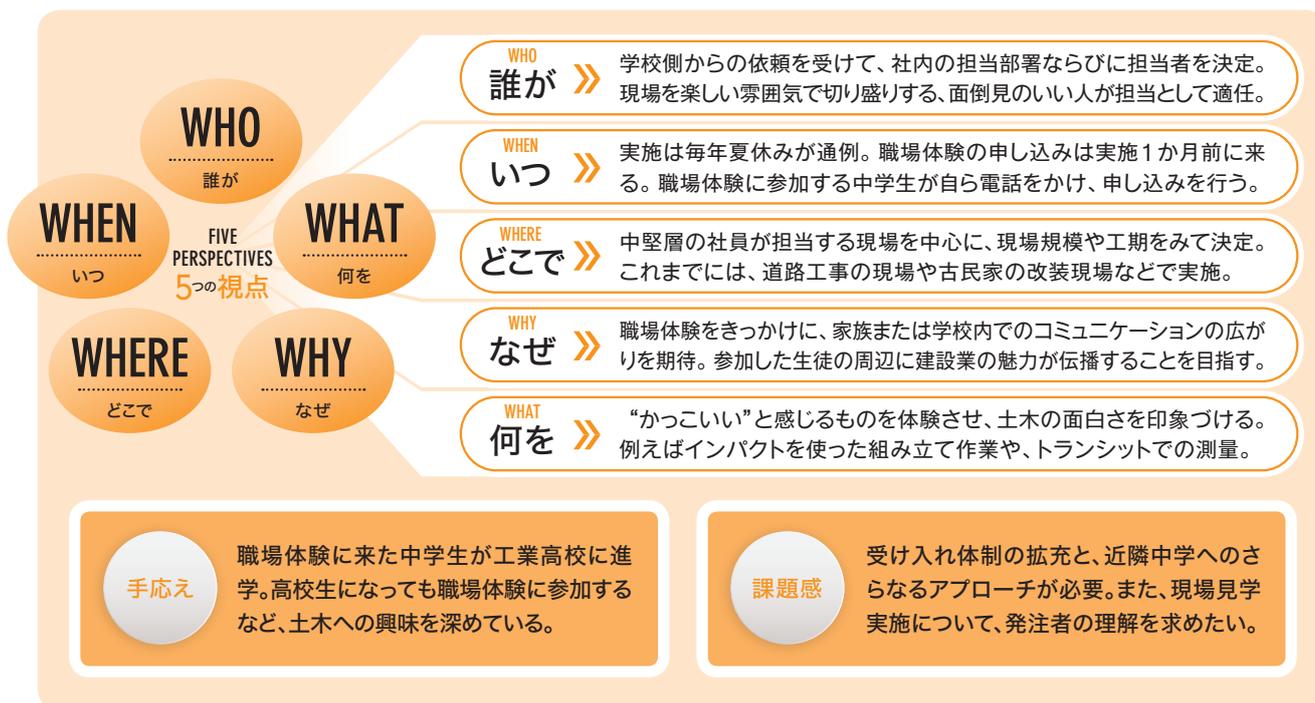
Company Data

- 所在地:〒380-0961 長野県長野市安茂里小市1-3-31
- 創業:1934年
- 代表者:代表取締役社長 高木 正雄
- 種別:総合建設業、1級建築士事務所、宅地建物取引業 ■ 業種:建設業
- 従業員数:80名(2020年2月1日現在) ■ 売上高:25億円(2019年8月)
- 企業ホームページ:http://www.takagi-kk.co.jp/
- ここ数年の新卒採用人数:高卒2名(うち女子0名)、専門学校卒2名(うち女子1名)大卒0名(うち女子0名)他(2019年度)



中学時の職場体験でインパクトを使いベンチを設置 “カッコいい体験”の記憶が、土木への興味をかき立てる

常務取締役 高木 亜矢子 さん／土木部 課長 関谷 敦規 さん／土木部 鈴木 亮 さん



誰が WHO / いつ WHEN

夏休みを利用した職場体験。 中学生にもわかりやすい内容に。

長野市安茂里で土木・建築業を営む総合建設業者、高木建設株式会社は創業85年の老舗だ。住宅・古民家・店舗の各種リフォーム、公共建築工事、土木工

事などを手掛け、特に古民家再生においては先人より受け継いだ匠の技を生かしている。

ビジネステーマとして「高い品質の確保と環境への取り組み」を掲げており、仕事の結果は10年後、20年後に理解されるものととらえ、自らの仕事を「信州で生まれ育った私たちができる未来への恩返し」と

定義している。

そんな同社が“未来への恩返し”として積極的に取り組んでいるのが、人材確保・育成だ。その一環として、中学生を対象とした職場体験の受け入れを、平成22年から毎年コンスタントに行っている。

職場体験とは、中学生のキャリア教育推進のために取り入れられた学習活動。



土木部 鈴木 亮さん

長野市の中学校では夏休みを利用して、7月末頃に行われることが多い。学校側は地元企業へ実施の約1か月前の6月頃に生徒の受け入れを申し出る。「職業体験に参加希望の生徒さんが自ら、申し込みの電話をかけてくるんですよ。とても丁寧な受け答えをするので感心します」というのは、常務取締役・高木亜矢子さん。体験日当日には学校が用意した“自己紹介カード”を持参。名前や部活、趣味、聞きたいことなどを生徒たちが記入したもので、このカードがコミュニケーションのきっかけとなるのだという。

「毎年2校から打診をいただきますが、職業体験に来る生徒さんすべてが建設業に興味をもっているとは限りません。建設会社でどんな体験をするのか、イメージできる生徒さんも少ない。ですから弊社ではまず、どうすれば建設に興味をもってもらえるか、建設業を理解してもらえるかについて考えます」(高木さん)

体験内容は受け入れ側に一任されるケースが多い。受け入れ時期に稼働している現場にあわせ、体験プログラムを作成している。「生徒に渡す資料づくりをしたり、仕事に対する理解を深めるための動画を探したり、受け入れ準備はすることがいろいろありますが、おおよそ1日くらいで完了させています。資料には、『なりたいのものにどうやったらなれるか』など、高校や大学・専門学校といった今後の進路に関することも入れて説明します。とにかく興味をもってもらい、いずれ建設業に入ってほしいという想いがあります」というのは、中学生の職場体験を担当することが多いとい

う土木部課長・関谷敦規さん。生徒用に仕事内容を整理することが、自分たちの業務内容を見つめなおす機会にもなるとともに、体験の受け入れが現場へのいい刺激にもなるのだそうだ。

また、実際に生徒たちを案内する土木部の鈴木亮さんは「生徒たちが緊張しない環境づくり」を目指しているという。

「急に大人の世界に入るので、最初はみんな緊張しています。現場へ向かう道中に自己紹介カードに書いてある趣味などを参考にして興味のある話題を振るなど、リラクセスできるようにしています。下の名前前で呼んであげると、仲間の一員になった気分になるのか、緊張が解けるのが早いですね。現場へ出かける前と、帰るときとで、全然違う表情になっていると、こちらも嬉しくなります」

生徒たちが楽しみながら体験できる雰囲気づくりをしたいという同社。より生徒に寄り添った準備をするため、体験日当日に持参される自己紹介カードが事前にもらえると助かるという。

どこで WHERE / どのように HOW / 何を WHAT

地元住民が使用するベンチを設置
見るたびに思い出せる体験を重視

同社では、建築と土木の両方で職場体験を受け入れている。土木担当として白羽の矢が立つことが多い関谷さんは、どのようなことに気を配り職場体験のプログラムを組み立てているのか。

体験は3日間行われる。時間は午前9

時～午後3時で、夏休みを利用して実施されることから、暑さ対策として午前中に現場をまわり、午後には室内での作業にあてることが多い。現場では危険を伴う作業も行っており、見学以上の実作業体験となると難しい。そこで関谷さんたちがよく実践しているのは測量体験だ。

「まずは歩数で測ることからはじめます。メーターで自分の歩数を測り、一步が何mかを知る。その上で、『じゃあ20m先まで目をつぶって歩いてみて』と、ゲーム感覚で体感的に測量を体験したり、レベル測量をやってみたり。そのほか、例えばコンクリートが固まる原理を解説したのちに、実際に自分たちでセメントを入れ、モルタルをつくってもらう。そこに自分の手形を残して、記念品として持ち帰らせています」(関谷さん)

また、中学生に体験させるものとしては、“インパクト”を使った作業も多い。

「インパクトはカッコいいイメージがあるので、好評です。以前、道路工事の現場で、広場に設置されるベンチを固定するためにインパクトを使った作業をしました。その時に、女子の中学生が実際に施工したものは、今でも利用されています。職場体験のときに撮った記念写真は、工事中の風景だったので、工事が完了した後で、同じ場所で撮った写真を学校に送りました。もちろん彼女たちがつくったベンチも写っています」(関谷さん)

建築や土木は形をつくる仕事だ。目に見えない箇所であっても決しておろそかにせず、世の中のパーツをつくっていることを、生徒たちは手形やベンチを見るたび



職場体験の様子。ベンチ設置や生コンクリートの水養生を行った

に思い出す。残るものをつくる、ということが同社の職場体験において、ひとつのポイントだといえよう。

加えて、土木・建築の社会的意義を伝える方法も模索している。例えば環境に対する配慮を学ぶような体験メニュー。生徒に好評だったのは、吸水性泥土改質剤を使いヘド口を土に生まれ変わらせるという実験だ。職場体験後に送られてくる感想文には、単に「楽しかった、おもしろかった」という感想にとどまらず、世の中の役に立つ仕事の片鱗に触れた感動がつづられている。決して派手な体験内容ではないかもしれない。しかし、生徒たちの記憶に、深く印象を残していることは間違いない。

なぜ WHY / 手応え

職場体験参加者はいわば代表者 彼らを糸口に業界の魅力を発信

中高生に何をどのように教えるか。その部分に頭を悩ませ、職場体験の受け入れを断念する企業も少なくない。同社でも試行錯誤を繰り返しながら、自社らしい「意

義」を確立させている。

「例えばセメントでつくった手形を家庭や学校へ持ち帰れば、それを見た家族や友人に質問を受ける。そうなれば、ただ楽しかったというだけでなく、具体的に何をしたか、どうやってつくったのかを話してもらえます。そういったコミュニケーションを通して、周囲の子たちが建設業に興味をもってくれたり、保護者や先生の理解が深まったりするかもしれません」と関谷さん。

「一度に受け入れができるのは、3名程度。私たちが直接教えてあげられるのは、本当にわずかな人数です。そう考えると職場体験では、若者の代表者に建設業の魅力を伝えているようなもの。しかし、その子たちが周りの人に話をしてくれたら、他の人にも間接的に魅力を伝えることができます。ひいてはそれが、建設業界への間口を広げるきっかけになる。そうやって『社会的な結びつき』へとつながっていくのが、職場体験の魅力です」(関谷さん)

この思いを裏付けるように、中学時代に職場体験で高木建設を訪れた女子生徒が、その経験をきっかけに工業高校へ進学した実績がある。



土木部 課長 関谷 敦規さん

「職場体験に来た工業高校の生徒のなかに見覚えのある顔があり、尋ねてみたら、中学生のときにも来てくれた子でした。びっくりもしましたが、それ以上によるこびがおおきく、職場体験をやりつづけてきて本当によかったと実感しました」(関谷さん)

また、職場体験を行う企業側の利点として、工事成績評定点への加算も挙げられる。こうしたことも勘案して、より多くの企業で職場体験を受け入れることが、業界全体の将来を考える上でも肝要だろう。もちろん現場に中高生を入れるためには、発注側の理解も必要だ。発注側の理解を広く求めつつ、より多くの企業が受け入れ協力することができれば、業界全体に新しい潮流が生まれるに違いない。



女性が活躍できる職場を目指し、 10年仕事として取り組む。

高齢化が深刻な建設業界では、職場体験をはじめとした種まきの施策の重要性が増している。

高木建設では長野県・長野県建設業協会女性部と共同で、建設業への女性の入職促進を目的とした「女性のための現場見学会」も開催。現場で働く技術者だけでなく営業、事務職の社員も参加してのイベントで、見学に訪れるのは子ども連れの主婦

や工業高校の生徒など様々。生後数か月の子どもや未就学児を連れて参加する保護者も珍しくない。

母親が建設業に興味があれば、子どもも自然とそうした方面に関心をもってくれるようになる。職場体験と同様に「いまの生徒たちが大人になるころを見越した、10年仕事として取り組んでいます」と高木さん。

現場見学のあとは参加者全員での昼食



常務取締役 高木 亜矢子さん

会を行い、交流を深めている。参加者たちとの会話の中で気づかされることも多々あり、教えるだけでなく教わる機会としても貴重な時間だ。

女性がますます活躍できる業界になるよう、高木建設では職場体験だけでなく、「女性のための現場見学会」も実施を重ね、その様子を自社サイト等で発信していくという。

Case 2

矢作建設工業株式会社

Yahagi Construction Co.,Ltd.

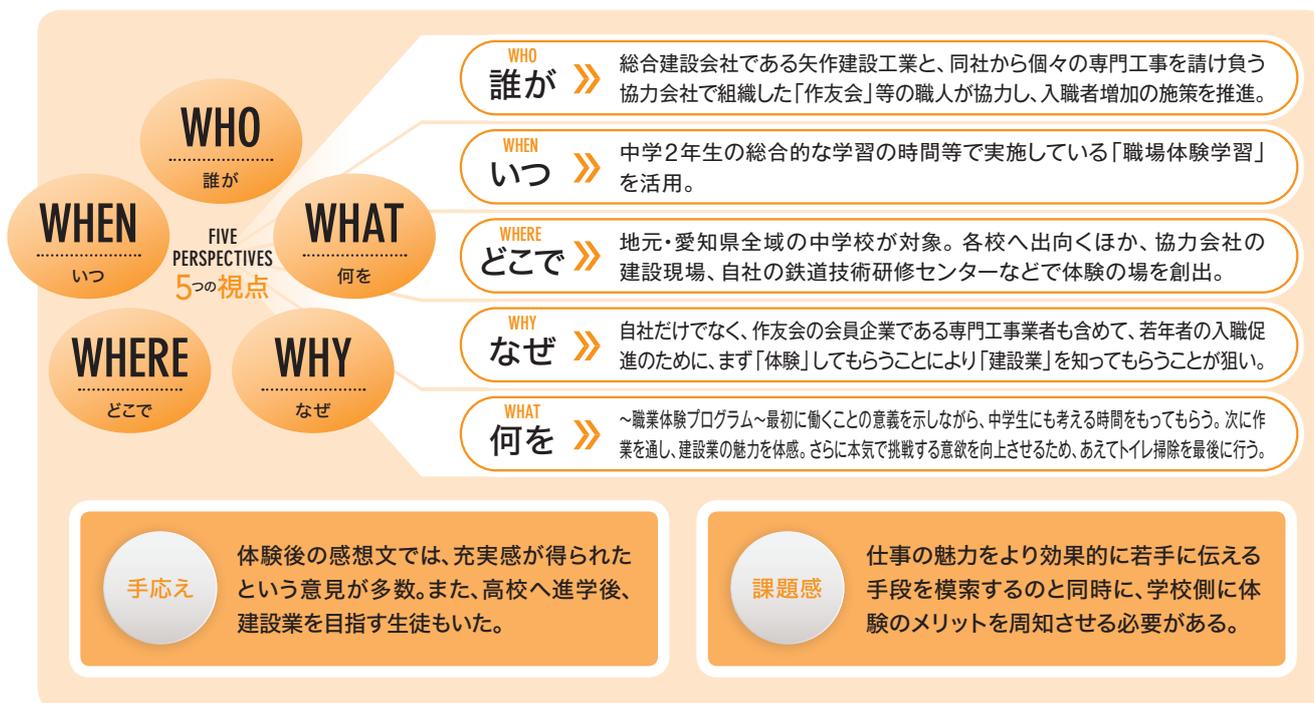
Company Data

- 所在地:〒461-0004 愛知県名古屋市中区東区葵3丁目19番7号
- 創業:1949年
- 代表者:代表取締役社長 高柳 充広
- 種別:総合工事業 ■業種:建設業 ■従業員数:1,109名(2019年3月31日現在)
- 売上高:927億54百万円
- 企業ホームページ:<https://www.yahagi.co.jp/>
- ここ数年の新卒採用人数:高卒5名(うち女子1名)、大卒41名(うち女子11名)他(2019年度)



中学生の印象に残るのは“話”よりも“体験” 職業体験を通し、本気で挑戦することの大切さを刻みこむ

土木事業本部 安全環境部 部長 紀伊保さん



なぜ WHY

協力会社と連携して 業界全体の人材確保へ

矢作建設工業株式会社は、愛知県名古屋市中区に本社を構える総合建設会社だ。1949年の創業以来、約70年にわたって地元で根差し、土木、建築、不動産開発

など幅広い現場に携わっている。また、名古屋鉄道グループ一員として、名古屋鉄道の軌道工事を請け負い、地域の安全と安心を支える一翼を担っている。

多くの協力会社と現場をともにする同社では、それら専門工事業者を中心とした組織「作友会」を結成。協力会社の技術力や安全・品質の向上を目的とした

活動の一環として、「1社ではできない取り組みを可能にする」ことを目指し、同社は事務局として会報誌「さくゆう」を発行している。優秀協力会社、YAHAGIマイスター（深読みポイント参照）の紹介や女性技術者の対談などを発信。人材確保・育成に関する取り組みのヒントになる情報を、各協力会社に周知している。

また、職人を目指す人たちに向けた求人サイトを運営し、各会員企業の概要と求人情報を発信。

事務局の中心人物であり、土木事業本部安全環境部の紀伊保さんは、「ここでは個社ではホームページをもてないような小規模企業も、情報発信できます。そうすると、職人に興味がある若者の目に触れる機会ができる。メリットの多い取り組みだと感じています」と語る。

いつ WHEN / どこで WHERE

自社の研修施設を 職場体験の場として活用

人材確保に対する施策として、同社が中学生へのアプローチを始めたのは、2014年。取り組みのきっかけは、自社や協力会社の社員の研修を目的とした「鉄道技術研修センター」が建てられたことだ。駅舎やホーム、踏切、警報機、分岐器、トンネルといった、鉄道関連の様々な設備が本物さながらに再現されている。

これほどのものを研修だけで使うのはもったいないと考えた紀伊さんは、早速高校生以下を対象とした見学会を企画。参加者を募ろうと近隣の小学校・中学校に飛び込みで訪問したところ、多くの中学校が職場体験の場を探していることを知ったのだという。

「名古屋市内の中学校では、中学2年生は3日間の職場体験実施が求められているようです。しかし、その受け入れ企業を探すのに、各校ともとても困っておられた。そこで、『当社で受け入れましょう』と申し出ました。すぐに近所の中学校の職場体験を、鉄道技術研修センターで行うことが決まりました」（紀伊さん）

今では愛知県全域の中学生の職場体験の受け入れをしている。「職場体験ができると聞いた」と中学校から直接電話で依頼を受けるほか、学校と地域との間を取りもつNPO法人から相談されることもある。実習場所も、鉄道技術研修セ

ンターのほか、各校や実際の建設現場など、ケースバイケースで調整している。

何を WHAT

仕事をする意義を伝えてから 現場の楽しさを体験する

中学生の職業体験では、“伝える順番”“伝え方の工夫”が大切だという紀伊さん。「中学生は『働く』ということが、まだわからない年齢です。『働くとは…』ということから、段階的に説明していく必要があります。『君たちのお父さんやお母さんは、とても頑張っているんだよ』そして、『たくさんの仕事があるけれど、どんな仕事も尊いんだよ』という話をしています」（紀伊さん）

働くことの意義を説明したら、次は実際の現場に足を運ぶ。現場でかっこよく働く職人たちの姿を目の当たりにしながら、同社や協力会社の若手社員と中学生が会話する機会を設けるのだという。「中学生から『どうしてこの仕事を選んだのですか？』『やりがいは何ですか？』と聞かれ、若手たちは一生懸命考えながら答えています。次世代の担い手である中学生に、自分の経験を自らの言葉で語ることは、若手のモチベーションアップにもつながると期待しています」（紀伊さん）

働くことの大切さ、かっこよさを伝えるまでは話を聞くことがメイン。しかし、ここからは中学生自身が体を動かし、建設業の仕事を経験していく。

「やはり、彼らの印象に残るものは、“話”ではなく“体験”です。建設業の職場体験

に来てくれたのだから、建設業は楽しいという記憶を残したい。それに、実際に体を動かして汗をかいて何かを完成させるという体験こそが、建設業界の醍醐味ですからね。体験内容は、一見とても簡単そうに見えるのに実際にやってみるとうまくいかないものを選ぶようにしています」（紀伊さん）

中学生に特に好評なのは、鉄筋の結束や型枠を組む作業だ。「鉄筋を結ぶ作業は、最初に見本を見せています。『簡単でしょう？ じゃあ、やってみようか』と言って挑戦してもらおう。職人たちはくるくると簡単にやっていたのに、いざ挑戦してみるとみんななかなか上手いれない。体験すると、職人がどれだけすごいかがわかるようです」（紀伊さん）

一方、型枠を組む作業では、「最初はあえてヒントを出さず、生徒たちに自由に組んでもらいます。すると、普通に釘で留めて『よし、できた』と。でも、型枠に水を流し込んでみると、型枠が崩壊してしまうんですね。次に、『プロの大工さんはこういう道具を使うんだよ』とやり方を説明して再チャレンジすると、今度は水を入れても崩れない。中学生たちも大満足です」と紀伊さん。中学生にとって気づきがある体験になるよう、その方法を工夫している。

いつ WHEN / 何を WHAT

職場体験の最後にはトイレ掃除で 生徒の“本気スイッチ”を入れる

楽しい印象を残すこととともに、生徒たちの心持ちの変化を重視したいという同



軌道施設見学や型枠製作体験、土木工事の現場見学などを通し、建設業の魅力を体感





土木事業本部 紀伊 保さん

社。「職業体験のテーマは、本気になること」とし、3日間の体験学習の最後に毎回行う体験メニューがある。それは、本気を引き出すために行うトイレ掃除だ。

「トイレ掃除を率先してやる中学生は少ないと思います。やりたくないことをしようと思ったら、本気になって取り組まなければならないでしょう。仕事には、理不尽なこともたくさんあります。そういうときに糧になるのは、つらいことに本気で立ち向かった体験。『あの時に比べれば大したことない』と、乗り越えられるはずですよ」と、トイレ掃除を取り入れる理由を説明する。

職場体験の冒頭に、生徒たちに「どんな仕事も尊いこと」、そして、仕事への意味づけがあると、「苦労した分、成長できる

こと」を説明したのは、トイレ掃除への伏線でもあったのだ。

「本気になるスイッチは、自分で見つけるしかありません。それを見つけたきっかけのひとつがトイレ掃除なのです。『“本気のスイッチ”を入れてやってみよう」と促すと、生徒たちの本気度は俄然上がります。全員が清々しい顔でトイレ掃除に熱中し、ピカピカしてくれます」(紀伊さん)

こうして中学生の時に職場体験でトイレ掃除をしたという高校生から、突然連絡が入ったことがあった。「トイレ掃除をして、本気の入れ方がわかりました」と言うその生徒は、普通高校から工業系の大学へ進学し、建設業に入ることを目指している。一朝一夕には結果は出ない。しかし、同社の取り組みは、確実に実を結ぼうとしている。

手応え / 課題感

次世代の建設業を担う若手に 職人自らが仕事への誇りを語る

職場体験後、中学校からは振り返りのレポートが送られてくる。そこからは、「“本気のスイッチ”の入れ方を教えてもらったおかげ

で、頑張ることができそうです」「建築士への夢のために勉強したいと思います」など、様々な発見があったことがうかがえる。

また、学校側の反応も非常に好評で、「先日中学校のホームページで、職場体験の様子が紹介されました」と語る。紹介記事に添えられた写真は、同社スタッフが当日の体験風景を撮影したものだ。

「当日撮影した画像や編集した動画をまとめたDVDを、中学校に送るようになっています。職場体験の様子を、先生や保護者にももっと知ってもらいたいですから」(紀伊さん) 今後は、子どもたちの体験の機会をさらに増やしていくのと同時に、協力会社の職人と生徒が接する機会をもっとくっていきたく考えているという。

「職場体験の授業も、今は私と技能者がペアで行っていますが、ゆくゆくは話が上手な技能者に全て任せたい。現場のプロから直接、『大工さんってこういう仕事だよ』『鉄筋屋さんってこういう仕事だよ』とメッセージ発信していったほうが、生徒たちの心に響くはずですよ。それが、建設業の未来を変えていくことにつながると思っています」(紀伊さん)



YAHAGIマイスター制度で、 現場での“働きがい改革”を実践

「YAHAGIマイスター」とは、作友会に所属する技能者の中でも特に優れたスキルをもった職長に与えられる称号だ。日額制で報奨金が支給されるとともに、現場では称号の印となるシャンパンゴールドに輝く特製ヘルメットを着用する。つまり、ヘルメットを見れば一目瞭然とYAHAGIマイスターだとわかる、特別な存在となるわけだ。近年はさらに、彼らをモデルにした写真集やマンガを

制作したほか、現場を囲うフェンスに大判のポスターを設置するといった仕掛けもつづいた。

この結果、「YAHAGIマイスターになりたいから仕事を頑張る」など、若手のモチベーションがアップ。同時に、YAHAGIマイスターになった本人も職長としての自覚が向上するという相乗効果があった。

「写真集はマンションのモデルルームにも置いてあり、『こういう人がこういう気持ちでつ

くっているんだ』ということを見学者に伝えるプロモーションツールとしても活用しています」と、紀伊さん。

中学校への職業体験学習などで若手入職の間口を広げるだけでなく、仕事へのやりがいを高めて離職者を減らす。「建設業界の“働きがい改革”を推進して、業界全体を活性化させていかなければ」という信念から、様々な施策が生まれていく。



土木事業本部 紀伊 保さん

Case 3

坂本土木株式会社

SAKAMOTO Civil Engineering

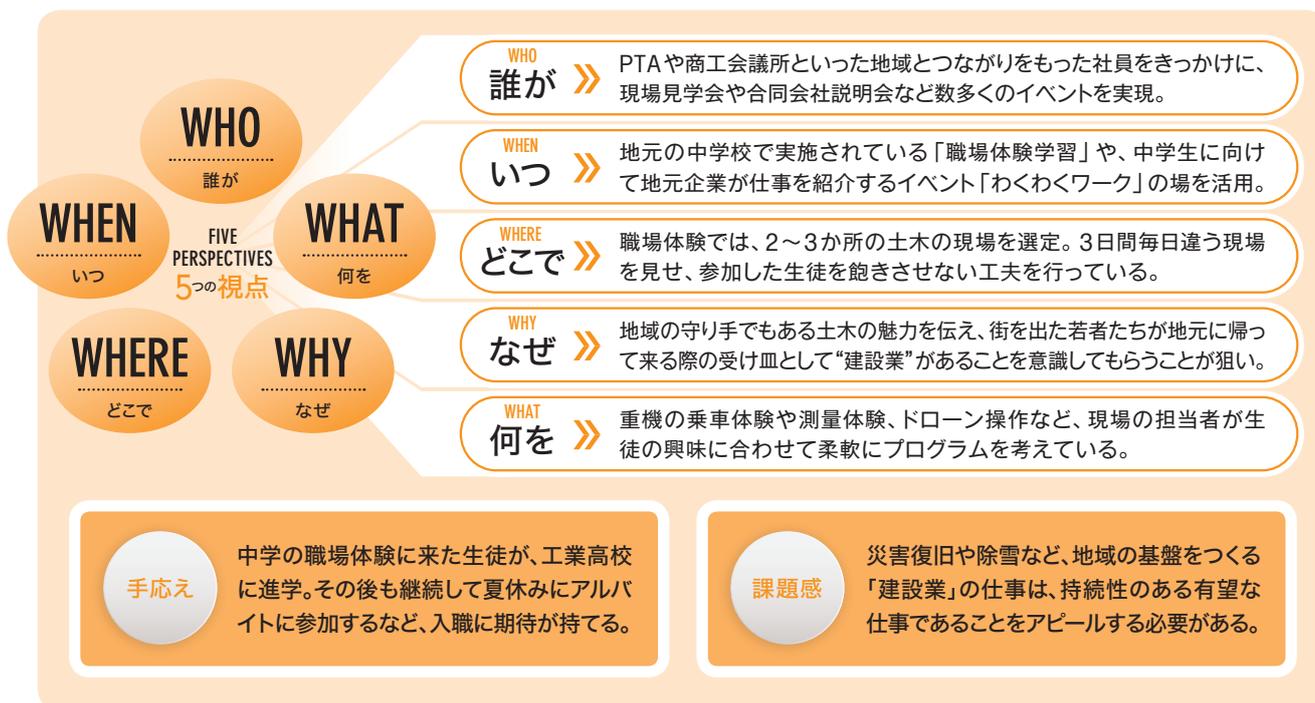
Company Data

- 所在地:〒506-1131 岐阜県飛騨市神岡町麻生野514-22
- 創業:1951年
- 代表者:代表取締役社長 坂本 重雄
- 種別:総合建設業 ■ 業種:土木・建設業
- 従業員数:54名(2020年4月現在) ■ 売上高:28億円(2019年5月)
- 企業ホームページ:http://www.sakamoto-web.co.jp
- ここ数年の新卒採用人数:高卒1名(うち女子0名)(2017年度)、大卒1名(うち女子0名)他(2019年度)



「地元には仕事がある」中学時に体験した建設業の記憶は流出した若者が地元・神岡に戻る際の足掛かりになる

代表取締役 坂本 重雄 さん／荒木 孝司 さん



なぜ WHY / 何を WHAT

地域密着型企业だからこそできる建設業界の魅力発信

岐阜県北部、富山県との県境近くに位置する飛騨市神岡町。坂本土木株式会社は、その地を拠点に道路整備や法面整備といった土木工事や、建築工事、除雪

作業など、多彩な事業を手掛けている総合建設会社だ。近年では山間部の豊かな水資源を活用した小水力発電事業にも参入。「良い仕事をして、顧客の信頼を得る」を経営理念に、1951年の創業以来、地域密着型の丁寧な経営を続け、飛騨の人々の暮らしを支えてきた。

鉱山の街として栄え、歴史を刻んできた

神岡町。しかし、近年では若年層の県外流出が進み、地域の働き手不足が大きな問題となっている。20年前には20代の若手が多く活躍していた同社も例外ではなく、いまでは若年層の獲得に苦戦。働き手の確保は、中途採用がメインだ。

そういった状況のなかでも、地元の学生たちに向けて、職場体験学習や現場見学



荒木 孝司さん

会、インターンシップなどを積極的に行い、建設業や土木の魅力を伝え続けている同社。飛騨・神岡の人々と共に70年以上のときを歩んできたからこそ、地域に貢献したいという想いがこの取り組みの根底にある。「地元の若者たちは、自分の住んでいる地域にどのような仕事があるのか、あまり知る機会がありません。地元での就職に興味をもってもらうためにも、まずはこんな企業があり、どんな仕事をしているのかを知ってもらうことが大切だと思っています。特に土木の仕事は、道路の保全や除雪など、人々の身近なところで地域の基盤を守る、なくてはならない仕事。我々が担っている役割ややりがいを、若い世代にも伝えていかなくてはならないと思います」と語るのは、代表取締役社長・坂本重雄さん。若年層の減少・流出が進むいま、地域密着型の企業だからこそできる建設業界の魅力発信を推し進めている。

いつ WHEN / どこで WHERE / 何を WHAT

複数の現場を巡る職場体験学習 生徒の興味に合わせたプログラム

なかでも、地元の中学校が行う「職場体験学習」の受け入れは、約10年前から継続的に力を入れている取り組みだ。

毎年、秋頃に中学校から連絡を受け、1～2名の生徒を迎え入れている。体験期間は3日間。より多くの仕事に触れてほしいという想いから、新しい道路をつくらしている現場、道路維持の現場、水力発電の現場など、毎日異なる土木の現場を回るスケジュールを組んでいる。

「どんな体験を行うかは、現場の担当者に任せています。重機に乗ることもあれば、道具を持たせて危険度の低い実作業の体験をすることもあります。測量に興味を示せば測量体験をするなど、現場担当者が生徒の様子を見ながら、臨機応変にプログラムを考えています。最近では、ドローンの操作体験を行っている担当者もいます。最新技術に触れ、実際に操作することは、興味関心をもつきっかけになるのではないかと思います」(坂本さん)

より多くの中学生に土木の魅力を伝えるために、数年前からは隣接する古川地区の中学校からも職場体験学習を受け入れ。

「古川地区は少し距離があるので、実施はなかなか難しい。しかし、受け入れ体制を整え、体験する機会を用意することが大切だと考えます。だからこそ、たとえ遠方からのお問い合わせでも、基本的に断ることはしていません」(坂本さん)

そうした取り組みの結果、職場体験学習をきっかけに土木の仕事に興味をもち、工業高校に進学した生徒もいるという。

「中学生の時に職場体験学習に来たその生徒は、今では高校の夏休みにアルバイトに来ています。当社でのアルバイトを通して土木の面白さを体感し続けることができ

れば、進路の選択肢のひとつになり得るのではないかと期待しています」(坂本さん)

誰が WHO / どのように HOW

地域との連携で広げる 中学生に向けた魅力発信の場

地域を代表する建設会社として、学生たちが土木に触れることができる場を模索していきたくと考えている同社。人口約8,000人規模の小さな町だからこそ、地域の結びつきが強固であるという強みを最大限に活かし、建設業の魅力発信の場を広げている。

「社員には、常に『地域とのつながりを大切にしてください』と伝えています。『グラウンドの土が悪くなっている』と、中学校から声がかかれば入れ替えますし、雪が積もって困っているという地域があれば除雪もします。そういったボランティア活動も積極的に引き受け、つながりをつくっておくことが大切だと思います」(坂本さん)

神岡の商工会議所青年部が主催する雇用促進事業「わくわくワーク」への参加も、社員と地域との関係性から生まれたものだ。このイベントは、複数の地元企業が中学校に集まり、会社や仕事についての



中学生の職場体験の様子。緊張感のある現場の作業であったが、現場担当者が見守るなか、測量や重機試乗などを体験した

説明を行うというもの。同社社員の荒木孝司さんが、主催の青年部会長と同級生だったことから参加が実現したという。

「わくわくワーク」は、中学生に向けて、住んでいる地域で活躍する企業や職業を紹介し、地元での就職を考える生徒を増やしたいという想いから毎年開催されている。中学校の体育館に各企業がブースを設け、学生3～4人が1グループとなり、興味のあるブースを回っていく。坂本土木では、重機を活用して土木の仕事をアピールした。

「当社は、机上で仕事内容を説明するよりも、実際に体験させるのがいいと考え、重機の試乗体験ブースを設けました。2019年の開催時は、1年生から3年生まで、5～6グループが訪れました。女子生徒もみんな面白がって重機に乗っていましたし、先生方からも『乗ってみたい』という声があがっていたのが印象的でしたね」(荒木さん)

その他にも、社員が中学校のPTA会長を務めていたことをきっかけに、現場見学会の開催が実現するなど、地域との縁を通して魅力発信の場を積極的に広げてい

るという。

地域とのつながりを大切に、活動を続けている同社。その根底にあるのは「会社である前に、自分たちがこの町の一員である」という想いだ。その想いで取り組む活動の数々には、保護者も安心感を抱き、会社への信頼を寄せることだろう。

「学生が進路を決める際には、保護者の意見が重要となります。そのため、保護者に対しても、建設業という仕事への理解を深めてもらう必要があると思っています。神岡は小さな町なので、体験に来た生徒の親の顔がわかってしまう。そのつながりの強さを活かして、保護者の信頼を得ることができれば、建設業へ入職したいという生徒たちを、安心して送り出してくれるのではないかと思います」(坂本さん)

なぜ WHY

受け入れ体制の充実で 若者が気軽に戻れる場所を目指す

職場体験や見学会など、建設業に触れる機会を多く設けてはいるが、入職者の確保や若年層の流出防止に直接的に歯止

めをかけるむずかしさも感じているという。しかし、それらの活動を通して、中学生や高校生には「神岡には、建設業という仕事がある」という記憶が残る。大学進学や就職で都心に出た若者たちが、数年後に「地元に戻ろう」と決めたととき、その受け皿として建設業を思い出してほしい。また、戻ってきた若者たちが安心して働けるよう、企業の受け入れ体制を強化することも大切だと坂本社長は語る。

「会社は、働く人こそが原動力です。そのため、働きやすい職場環境を整えることは、会社のミッションでもあると思います。当社は、給料や休日日数の確保といった待遇面の改善、遠方からの就職支援や未経験者へのサポートなどにも力を入れています。一度街を出た地元の若者たちが気軽に戻って来られる場所として、魅力を感じてくれたら嬉しいです」

実際に、坂本土木の中途社員は、進学や就職で街を出て、数年後に戻ってきた社員も多い。未来の入職者につながる土台づくりとして、今後も積極的に若年層に向けた建設業の魅力発信を、地域とともに行っていきたいという。



UIターンや遠方からの就職にも手厚いサポート 見やすいホームページで、受入窓口もオープンに

地元での働き手の確保はもちろん、1ターンの移住者や海外の技術者など、多方面に門戸を開いている同社。遠方の就職希望者にはWeb面接を実施したり、会社見学の費用を一部負担したりと、手厚いサポートを用意している。

その受け入れ窓口として大きな役割を担っているのは、2019年にリニューアルオープンしたホームページの存在だ。坂本さん

は、「同業他社から転職してくれた社員や、ベトナムの技術者もホームページを見て応募してくれました」と話す。

コーポレートサイトとは別に、求人情報を載せる採用サイトも用意している。移住者の体験談や1日の業務の流れ、休日での過ごし方など、中高生でもわかりやすいように、写真をふんだんに用いて働いている社員の様子を紹介。会社の魅力が存分に伝



代表取締役社長 坂本 重雄さん

わってくる内容となっている。

また、福利厚生や休日数、キャリアアップや取得できる資格といった、学生が知りたい情報を多数掲載。就職を考えている学生たちにとって、働く上での不安要素を解消することもできるだろう。しっかりと情報を掲示し、安心して働ける会社として魅力を発し続けている。

人材確保で大切なのは「採用」と「定着」 離職させないための、「働かせ方改革」を推進

代表取締役会長 大久保 幸二 さん / 人事労務顧問 木戸 勝彦 さん

大幸建設株式会社

DAIKOH Corporation

Company Data

- 所在地:〒333-0861 埼玉県川口市柳崎2-5-3
- 創業:1976年
- 代表者:代表取締役会長:大久保 幸二
- 種 別:専門工事業
- 業 種:型枠工事一式、一般建設業
- 従業員数:63名
- 売上高:58,276万円
- 企業ホームページ:<https://bso15652.bsj.jp/>
- ここ数年の新卒採用人数:高卒7名(うち女子0名)、大卒0名(うち女子0名)他(2018年度)

創業44年の専門工事業者が 高卒生積極採用に立ち上がる

型枠専門工事業者として、昭和51年に千葉県船橋市で創業した大幸建設株式会社。昭和30年代後半から昭和40年代初頭頃の高度経済成長期に建設業界で専門職種が分業化。その波を受け、同社は誕生した。創業以来手掛けているのは、マンションや学校・病院等の新築工事、また耐震補強工事や改修・改築工事など。常に安全を最優先に考え、地域の発展に貢献している。

現在同社では、技能工の多能工化を促進。業務範囲の拡大を目指しているが、技能工の高齢化が進む一方で、若年層の入社は鈍化している。人材の安定的かつ継続的な確保は最重要課題だと感じ、代表取締役会長 大久保幸二さんは5年前から高校生の採用活動を本格的に開始した。

高卒生採用の肝は先生との関係性 年3回の学校訪問を徹底

当初は、「自身の出身地である東北地方の学校を中心に、会社のPRに回って



代表取締役会長 大久保 幸二さん

いた」という大久保さん。しかし昔のように採用がうまくいかなかった。「最近の生徒たちは地元志向が強い、また保護者が県外に出したがることを実感しました。そこで3年前に採用活動に関するアドバイザーを起用し、採用活動のやり方を見直しました」(大久保さん)

人事労務顧問として木戸勝彦さんが採用活動に参加して最初に行ったのは、高校の進路指導の先生と関係性を築くこと。なぜなら、高校生を採用するためには、まずは学校推薦の枠に同社が入り込む必要があるからだ。そこで、「この学校の生徒に入学してほしい」といった“ターゲット校”を定め、重点的に関係性を高める努力をした。ターゲット校の対象は工業高校・普通科高校を問わず、埼玉県内の特に県南地区の高校。



人事労務顧問 木戸 勝彦さん

「多い年には20校ほどありましたが、最近は15校ほどに絞りました。高卒入職者に必要なのは、建設業に対する知識よりも、やる気があること。工業高校を卒業していても、3年もすれば普通科高校を卒業した人との差は感じられなくなります」(木戸さん)

また、より有益な情報を得るためには、学校訪問のタイミングにも気を配る。「当社では年3回学校訪問をしています。最初は、4月後半から5月連休明けにかけての頃。主に、その年の3年生の傾向をリサーチします。このタイミングであれば、6月にある進路決定のための三者面談で就職の方向性が決まる前に、会社のアピールができます。残りの2回は、求人票を持参する7月と、二次募集を行う9月下旬から10月上旬頃です」(木戸さん)



生徒を推薦してくれるようになるまでには、少なくとも3年かかるとの見込み、地道な訪問活動を続けてきた同社。現在、ターゲット校からの入職者が出てくるなど、少しずつ手応えを得ている。

高卒生採用に光明。その要因は、 初任給の増額や労働条件の改定

ターゲット校の訪問でよく耳にしたのが、「建設業は給与や休暇などの水準が、他業界よりも低い」ということ。これを受け、高卒入職者の給与の見直しに取り組んだ。日給制が基本の業界でありながら、3年前から月給制を採用。その額も、4大卒生並みにアップし、安定的な給与体系を示した。「当社は、中堅層が少ない社員構成をしている小規模な会社です。そのため、新卒の初任給を上げて他の社員への影響は少ない。小回りが利く会社の特性を活かした取り組みです」と、大胆な打ち手が可能になった背景を木戸さんは語る。

さらに、業界全体で取り組みが遅れていた休日のルールづくりを推進している。「基本土日は休み、月に1回だけ土曜日出勤としました。もちろん工期の都合で、どうしても出勤しなければならないこともあります。その場合は、休日出勤手当を支給。収入に反映するので、社員のモチベーションも上がっています」(木戸さん)

処遇改善を行うことで、当初の狙い通りに毎年2～5名の高卒入職者を増やすこ

とに成功。毎年コンスタントに5名ほどの新卒を採用し続けられるよう目指している。

若手技能者の「定着」のために 丁寧な面談や研修で支援

「採用と両輪をなして重要なのは、入ってきた人材を辞めさせないこと」だという大久保さんは、社内サポート体制の強化にも積極的だ。その取り組みのひとつが、定期的な面談。会長自らじっくりと、若手社員の話に耳を傾けている。

「高校を出たばかりの社員は精神的に不安定なところがあり、サポートが必要です。不安なこと、悩んでいることがあれば、その場で一緒に解決しようとしています」(大久保さん)

経験を積んだ社員であれば当たり前のことでも、新人にとっては大問題という場

合もある。仕事に足踏みしてしまう現状を打破する解決策を立てるためにも、面談は大切なだと木戸さんはいふ。

「ヒアリングした内容は、現場にも伝えます。月1回の職長研修会では、今の若者にはどう接すれば良いのか、落ち込んだ時にはどう鼓舞すれば良いのかといった情報を共有しています」(木戸さん)

また、現場に出るまでの新人研修は、4か月間一切現場に出さず丁寧に行っている。まずは同社が擁する資材センターで、ベテラン職人からの指導を受けながらの技術習得と座学。さらには、富士教育訓練センターでの約1か月間の合宿研修を行い、現場デビューとなる。

「ベテランの技能工が個々の習熟度や理解度に合わせて、きめ細やかに指導できています。それに加えて外部宿泊合宿では、体系的に知識や技術を身につけることができます」(木戸さん)

しかしながら現在、入社3年後の離職率は「残念ながら、5割近く」。

「建設業は、きつくて危険、汚い、朝が早い、ルールも厳しいというイメージがあります。しかしこれからは、明確な給与・休日体制、希望のもてる職場といったクリーンな方向に向かう時代です。そういった職場環境を整備するのが、私たち企業側の役目。そろそろ働かせる我々側の意識を変えて、業界全体で“働かせ方改革”をしていかなければならないと感じています」(大久保さん)



丁寧に行われる新人教育の様子

中学生・高校生と 建設業の接点に関する アンケート結果

担い手確保に向けた取り組みが喫緊の課題である建設業。建設会社はもとより工業高校では、中学生をターゲットにした建設業の魅力発信が盛んに行われるようになりました。その取り組みの数々は、どのような形で中学生に届いているのでしょうか。本アンケートは工業高校生を対象に、工業高校に入学した理由など、自身の中学生時代を振り返って回答いただいた調査です。そこから「中学生へ建設業の魅力を伝える」ためのヒントを探ります。

調査対象

今回ヒアリング調査を実施した工業高校を含む、宮城県1校、群馬県2校、東京都1校、岐阜県2校、岡山県1校、熊本県1校の工業高校建設系学科の1～3年生を対象とする。

調査時期

令和元年12月～令和2年1月

回答数

1,092
(内訳/1年生:396、2年生:344、3年生:352)

実施方法

対象へアンケート用紙を配布し、郵送、FAX、メール等にて回収

※図表中の「n」(Number of casesの略)は、設問に対する回答者の総数を示しており、回答者の構成比(%)を算出するための基数である
※複数回答の設問においては、%の合計が100%を超える
※%の比率は、小数点以下を四捨五入して表示している

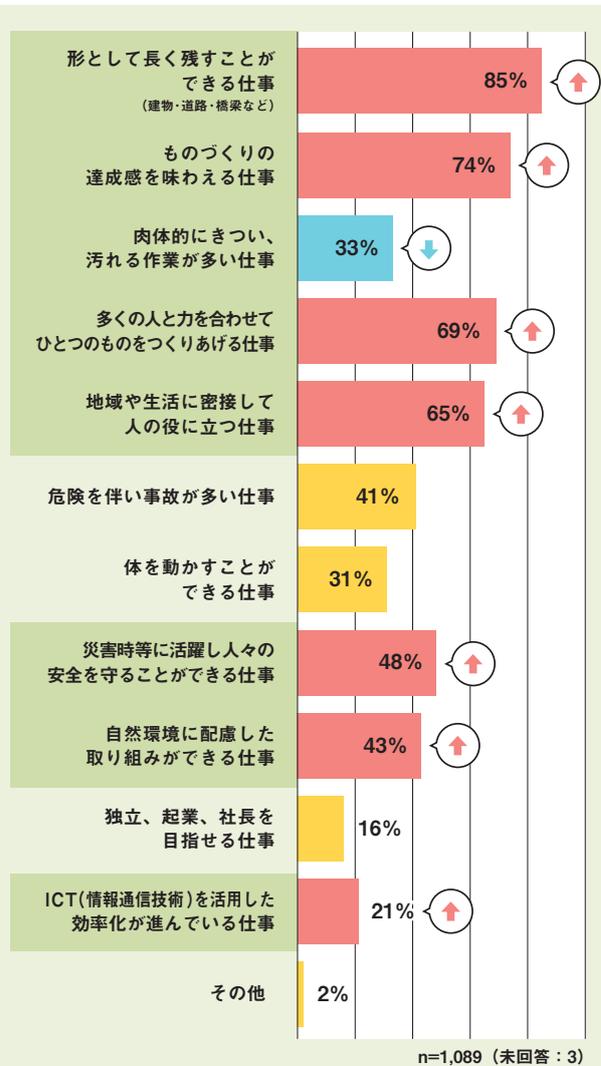
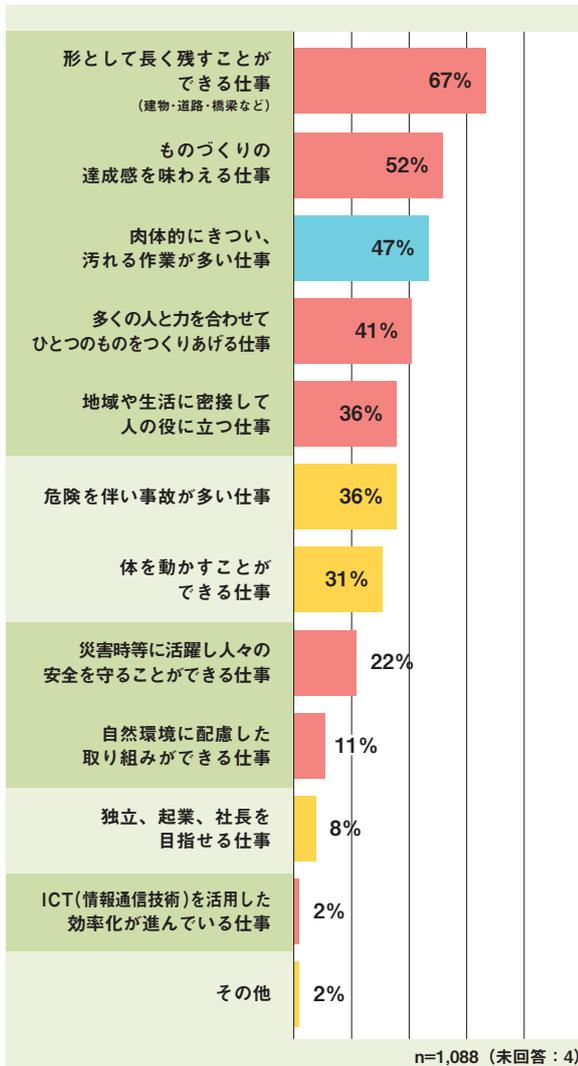
中高生の「建設業」へのイメージとは

あなたは建設業に対して、「中学生の時」どのようなイメージをもっていましたか？
また、「現在」はどのようなイメージをもっていますか？ ※複数回答可

中学生の時

変化

現在



●その他

- ・一生なくならない仕事
- ・人を幸せにできる仕事
- ・自分の家を自分で建てることできる
- ・自分の住んでみたかった家をつくれる
- ・自分で考えたものを自らの手で作りあげることができる仕事
- ・カッコいい仕事
- ・細かい部分まで考え、早く丁寧に仕事
- ・女性が少なく、男性が多い

●その他

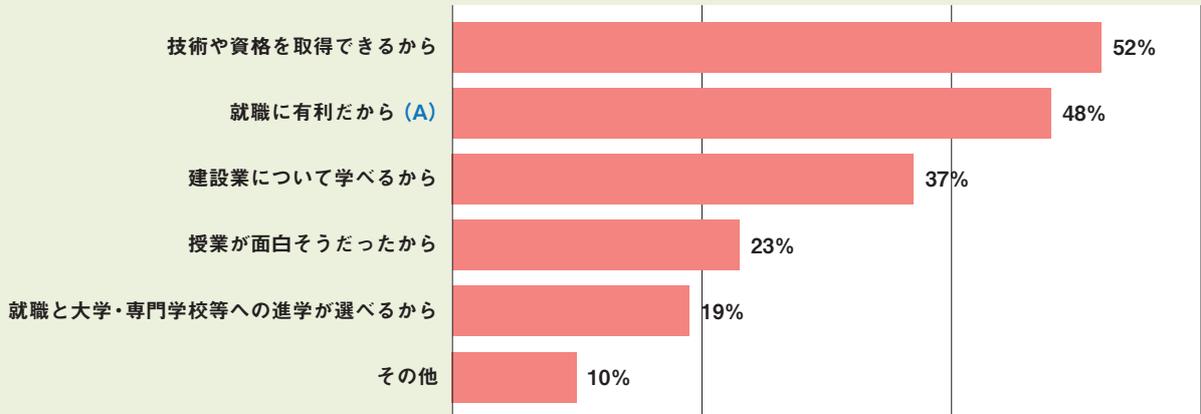
- ・どこまでも進化し続ける仕事
- ・人の暮らしを支える仕事
- ・誰かを笑顔にできる仕事
- ・一生の仕事
- ・女性が増えてきている
- ・収益が高い仕事
- ・センスが必要な仕事
- ・やりがいがあり、達成感を得ることができる

- ≫ 「中学生の時」「現在」ともに、「形として長く残すことができる仕事」というイメージが最多。
- ≫ 「中学生の時」と「現在」を比べると、「肉体的にきつい、汚れる作業が多い仕事」は14%下げ、イメージが向上している。
- ≫ 「地域や生活に密接して人の役に立つ仕事」「自然環境に配慮した取り組みができる仕事」「多くの人と力を合わせてひとつのものをづくりあげる仕事」は30%前後ポイント増。

POINT 工業高校の授業や体験を通し「建設業」を学び、その魅力に触れることで理解が深まる。

工業高校への進学理由

■あなたが工業高校(建設系学科)に入学しようと思った理由は何ですか? ※複数回答可



n=1,089 (未回答: 3)

●その他の入学理由

夢・あこがれ

- ・将来の夢が大工になることだから
- ・建築士になりたいから
- ・父へのあこがれ
- ・親の仕事を継ぎたいと思ったから
- ・建築について高校のうちから学び、さらに大学進学して学びを深めたかったから
- ・カッコいいイメージがあった

技術への興味

- ・小さい頃からものづくりが好きだったから
- ・家の内装を見るのが好きだったので、家の模型がつくりたかった
- ・建築が好きだったから
- ・電気の勉強をしたかったから

学校への期待

- ・普通科の授業ではできないことがあった
- ・進路決定の時にはやりたいことはなかったが、将来の夢につながればいいなと思った
- ・部活もやりながら勉強するのに最適だと思ったから
- ・専門的な勉強ができるから

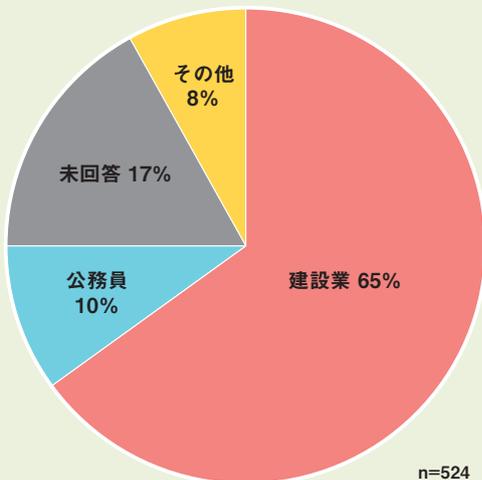
その他

- ・やりたい部活があったから
- ・家が近かったから
- ・制服がかわいいから
- ・自分の学力に合わせて
- ・友人に誘われたから

» 「技術や資格を取得できるから」と答えた生徒が52%、次点で「就職に有利だから」が48%。

POINT 技術を身につけた上で、高卒で就職することを志し、入学を決めた生徒が多い。

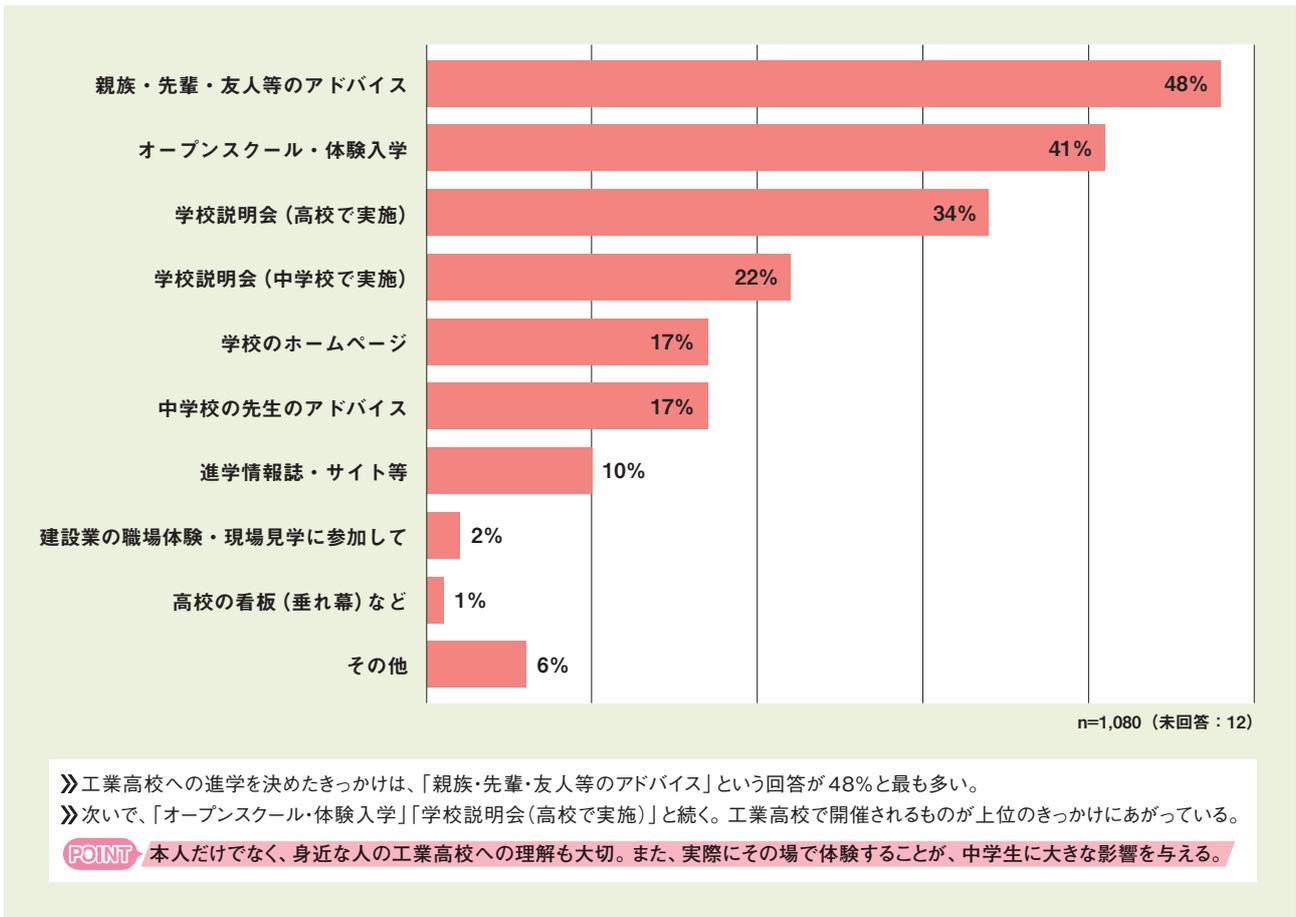
■(A)「就職に有利だから」と回答した48%の生徒に聞きました。高校入学当時の希望職種は何ですか?



n=524

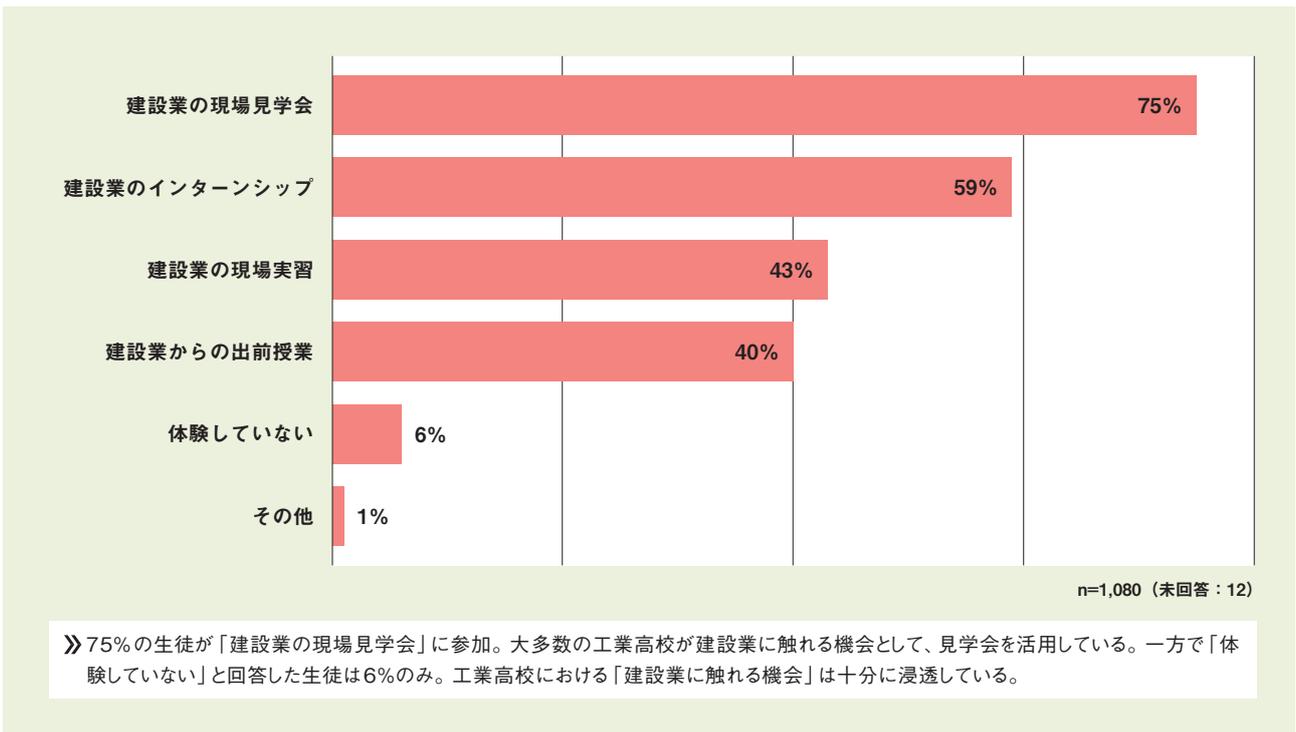
» 「就職に有利だから」と答えた生徒のうち、65%が建設業への就職を希望して工業高校へ入学しようと考えていた。

■工業高校に入学しようと思ったきっかけは何ですか? ※複数回答可



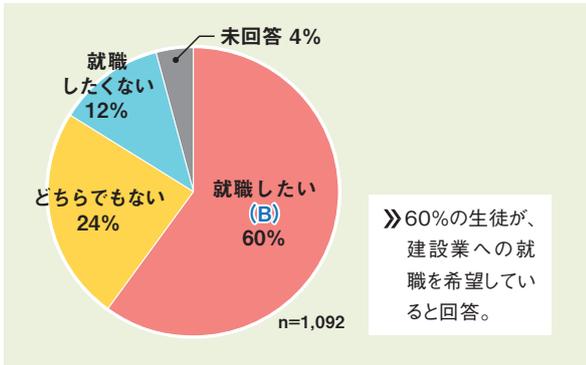
工業高校生の建設業との接点

■あなたは「高校に入学してから」どのような建設業の体験をしましたか? ※複数回答可

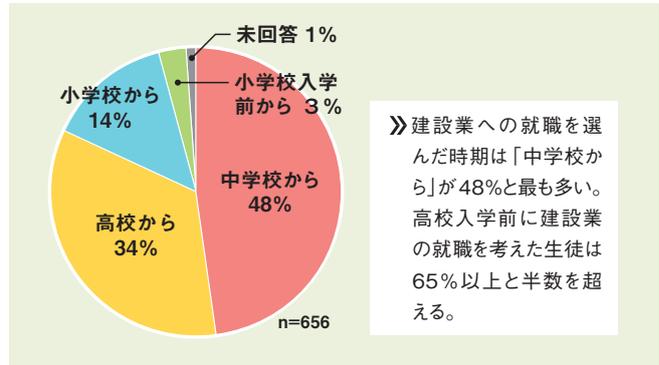


工業高校生の進路について

■あなたは現在、建設業に就職したいと思いますか？

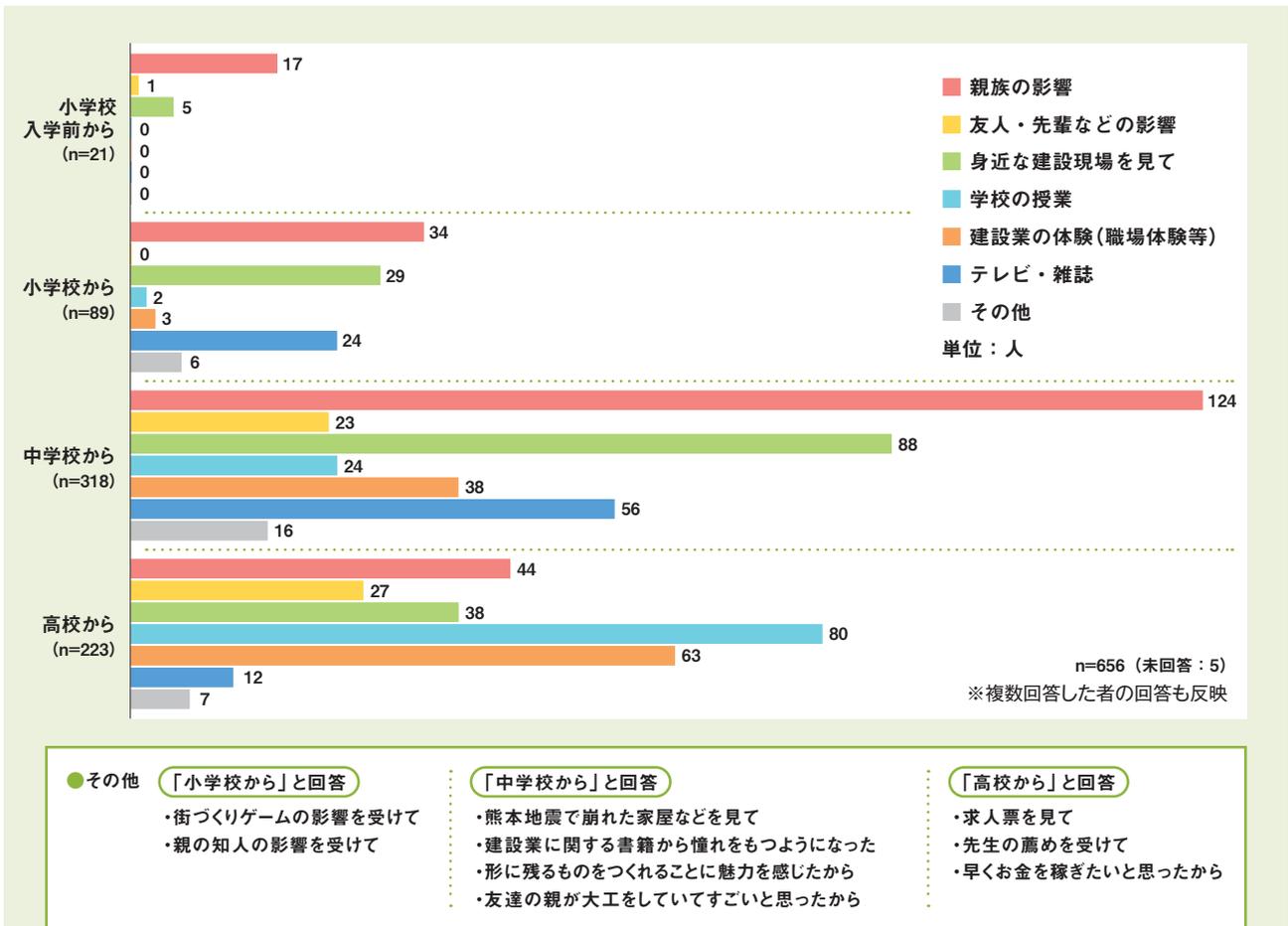


■(B)建設業に「就職したい」と回答した60%の生徒に聞きました。就職したいと思ったのはいつ頃ですか？



■(B)建設業に「就職したい」と回答した60%の生徒に聞きました。就職したいと思った理由は何ですか？

※上述の「就職したいと思った時期」別に集計



》「中学生」の時に建設業へ就職したいと思った生徒の124人が「親族の影響」がきっかけだったと回答。次に多いのは、「身近な建設現場を見て」が88人。

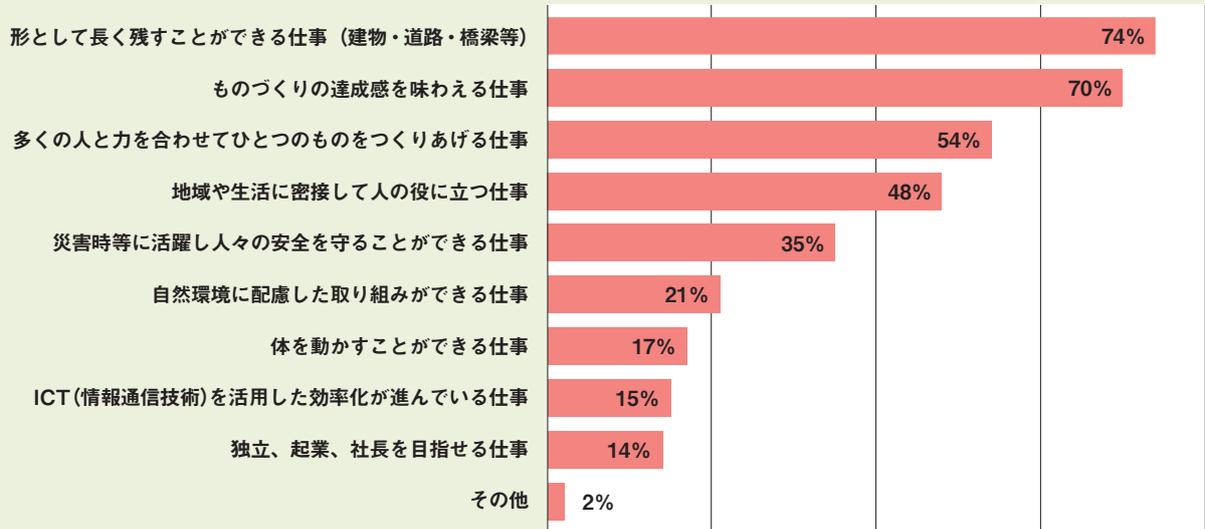
》「高校生」で建設業へ就職したいと思った生徒のうち、「学校の授業」がきっかけになったと答えた生徒が80人と最多。次に「建設業の体験(職場体験等)」が多い。

POINT 中学生の頃は、自分の身近な環境がきっかけとなり建設業への興味をもつことが多いとかがえる。

一方、高校生になると実際に自分が建設業と関わった経験から、自分の意志で就職を決める生徒が多いといえる。

工業高校生が思う、小中学生に対する建設業のアピールポイント

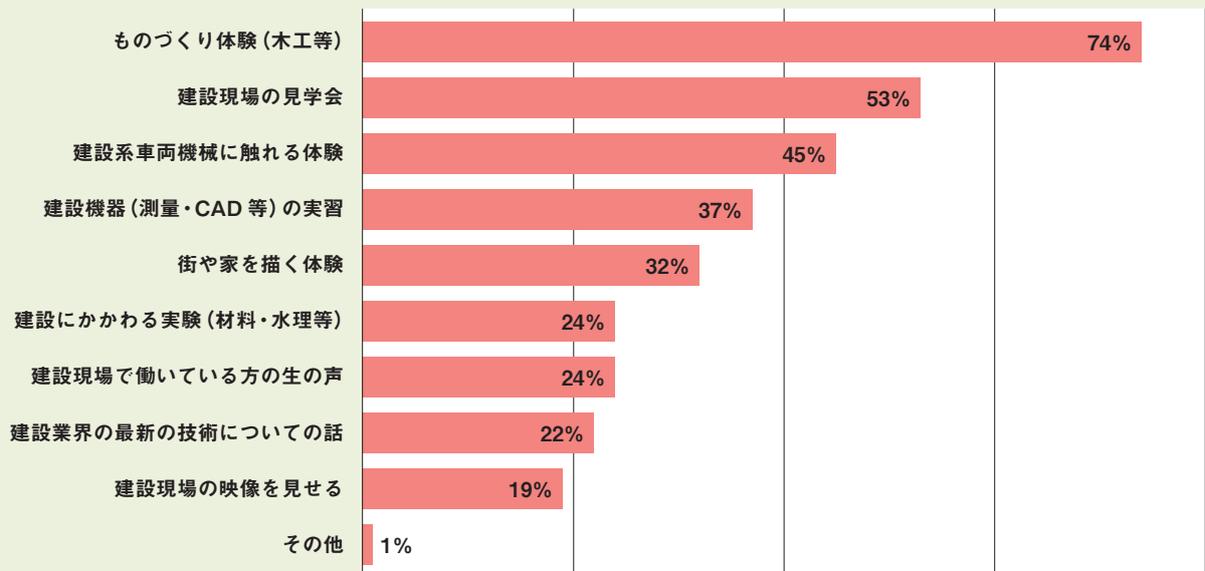
■あなたが思う小中学生にアピールすべき建設業の魅力は何ですか？ ※複数回答可



n=1,056（未回答：36）

- ≫ 「形として長く残すことができる仕事」（74%）、「ものづくりの達成感を味わえる仕事」（70%）と、建設業の醍醐味である“ものづくり”にかかる項目が上位を占めている。
- ≫ その他の回答には、「夢が広がる仕事」「個性が活かせる仕事」「笑顔が生まれる仕事」など希望に満ちたコメントがあがる一方で、「良いところだけではなく、悪い面、危険な面も説明する」という意見も見られた。

■小中学生に建設業の魅力を伝えるために、どのような「職業体験」をすべきだと思いますか？ ※複数回答可



n=1,056（未回答：36）

- ≫ 職場体験の内容に関しては、74%の生徒が「ものづくり体験（木工等）」をするべきだと回答。その他の回答には「ドローン操作」「長い話ではなく、実際に自分で体験するもの」などがあげられた。

POINT 小中学生には、体験型が有益だといえる。

もっと/小中学生に
興味をもってもらいたい!

工業高校生のアンケート回答に見る、 建設業の魅力の伝え方



建設系車両機械をVRなどで操作してもらおう。小学生は大きい乗り物が好きだと思うので、楽しんでもらえると思う。

話だけだと小中学生は退屈だと思うので、**測量・建設機械**を見せるなどの体験をさせる。また、**話→体験**ではなく、**体験→話の順番**の方が印象に残ると思う。

小学生は、楽しいか楽しくないかで印象が決まると思うので、実際に体験させる。中学生には給料が高い、休みが取れるなどの情報を伝えれば興味をもつと思う。

建設業の 実習体験

ドローンによる測量を体験させてあげる。ドローンは高校生から見てもすごいものだと思うし、小中学生はカッコいいものが好きだと思うから。

家に持って帰れる記念品づくり。家でその記念品を見るたびに、**ものづくりの楽しさ**やその日のことを思い出せると思う。

コンクリートの作成や、コンクリートの圧縮実験など。小学生くらいの年齢なら下手に話すよりも体を動かした方がわかりやすいと思う。

- 小学校高学年～中学生みんなで家の模型をつくる。協力することでひとつのものをづくりあげる体験ができるし、完成した時の達成感もある。

小中学校では土木についての体験・授業が少なかったので、そういう授業を増やしてほしいと思う。そこから土木（建設業）に興味をもってくれたらさらに嬉しい。

小学校や中学校で講演を行う。今の親世代（建設業をよく知らない親）は建設業に悪いイメージを持っている人が多いと思うので、親にも参加してもらい、建設業のイメージを良いものにする。意識が変われば子どもにも薦めてくれると思う。

建設業が地域と密接に関わっていることを、もっと身近な人（親・兄弟など）から伝えてもらう。



中学生に建設現場に行く機会を与える。そうすれば3Kのイメージが変わると思う。

建設業の イメージアップ

小中学生にとって、現場の人たちは少し柄の悪いイメージがあるので、もっと学校などに接しに来るといいと思う。

建設現場で何を行っているかわかりづらいため、仮囲いをデザインして、中のものを見せたりする。

小学生には「災害時に活躍できる」という活躍ポイントを教え、ヒーロー感を伝える。ヒーロー漫画とコラボしたりすれば、子どもは集まると思う。中学生には、**労働時間、休日、賃金を他の業界と比べて**教えてあげるとイメージが上がると思う。

最新のを伝えたり、見せたり、触らせたりすると思う。自分は小中学生の頃、建設会社は「汚れてつらい仕事」というイメージが強かったが、高校で測量・建設機械を見て「やっと」変わってきていることを知った。小中学生のうちから最新のものを見せれば「これならできるかも?」と、少しでも興味をもってくれるのではないと思う。

最新技術の未来プロジェクトなどの講演を行う。子どもにとっては夢のようなことなので、興味をもてるのではないと思う。最近はYouTubeなどの動画サイトも小中学生が見るものとなっているので、狙い目だと思う。

- 建設業というと「建物」だけ
- をつくるイメージが小さい
- 頃にあったので、そうではなく橋やダムなど、「歴史上に形として長く残せる、社会的にも価値のあるもの」がつくれる職業である」ということを、どのような形でもいいので小中学生に伝えるといいと思う。

魅力を伝える・発信



2019年の台風19号で、どれだけダムが活躍し、たくさんの人の命を助けたのかムービーで伝える。

中学2年生に現場見学をさせる。中学3年生から受験が始まるので、受験のきっかけをつくれると思う。

建物ができるまでを定点カメラで撮り、見せる。建物が実際にできるまでの工程を見せることで、身近な建物に興味をもってもらえると思う。動画だと昼夜サイクルもあるのでいいかも。

メリットを言うだけでなく、少しデメリットを話す。小中学生には、まず建設業の良いところと悪いところを理解してもらうことが大事だと思う。

- 建設業がどのような仕事をするのか、その魅力などを小中学生にもわかりやすいように、絵本や漫画をつくって伝える。

建設会社が小学校低学年に、実際に家を建てている現場を見学させる。私は小さい頃にそういう現場を見学して、「大工になりたい」とはっきりとした目標ができたから。

建設会社が小中学生を対象に、家のデザインコンテストを開催する。

- 建設業は男性のイメージが強いので、女性を対象にした現場見学会や体験の場をもっと増やす。そうすれば男性だけではなく、女性にも興味をもってもらえると思う。

その他 こんな意見も!

自分が中学生の時、職場体験先として建設会社を希望したが、新しい仕事が入ったからと、体験に行けなかった。なので、中学校の職場体験に協力してくれる会社を増やすのがいいと思う。

小中学生の思い描く自分の住みたい家を、建設会社の人実際にリアルな絵や設計図面にしてみる。



中学校における キャリア教育・ 職場体験の現状

Introduction

キャリア教育とは…

Focus 1 | 教育委員会におけるキャリア教育の現状

千葉市教育委員会

市教育委員会を中心とした協力体制
県立産業系専門高校や市内企業と中学校を橋渡し

Focus 2 | 公立中学校の教育現場

千葉市立大椎中学校

職場体験の準備は実施の4～5か月前から開始
必ず要望する体験メニューは「社員インタビュー」

Focus 3 | 教員の建設業体験

実務施工体験研修

建設業界と教育現場の連携強化
ーキャリア教育の多様化が進む今こそできる取り組みー

提言 | 建設業振興基金からの提言

中学生と建設業の接点をつくる
“魅力発信の場”拡大に向けた提言

キャリア教育とは…

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発展を促す教育

文部科学省による定義

→ 目指すべきは

基礎的・汎用的能力

人間関係の形成・
社会形成能力

+

自己理解・
自己管理能力

+

課題対応力

+

キャリア
プランニング能力

の発達・育成

データで見る“キャリア教育”&“職場体験”

■ キャリア教育について

公立中学校に
おけるキャリア教育
担当者の配置

キャリア教育の組織的な
推進は進んでいるもの…

98.0%^{※1}

第3学年の学級担任・副担任あるいは学科主任との兼任 40.8%

第1・2学年の学級担任・副担任あるいは学科主任との兼任 30.3%

進路指導主事との兼任 61.4%

※1

キャリア教育担当者とは…

≫ 学校内のキャリア教育の指導計画や全体計画を立てるなどの役割を担った教員。

■ 職場体験について

公立中学校に
おける職場体験
実施状況

98.6%^{※2}

↑
前年より
0.5%増加

主たる実施学年は2年生 85.7%

実施期間は… 3日間 36.6%

2日間 33.0%^{※2}

建設業の職場体験実施状況

≫ 千葉市内の中学校における建設業の職場体験実施状況は 0.1% (11名/7,888名) ※平成28年度実績(千葉市教育委員会調べ)

職場体験のポイント

≫ 「職場体験」を一過性のイベントとしないため、職場体験活動での事前事後指導を実施する学校が多い。

事前事後の指導とは…

事前指導 ≫ 「体験内容の調査や事前訪問」

事後指導 ≫ 「職場体験の記録のまとめ」「職場体験報告会」

≫ 体験した内容を多くの生徒の前で発表する職場体験報告会は、他業種の職場体験に参加した生徒に対しても建設業の楽しさが伝わる機会。「人に話したくなるほどの魅力」を印象付ける体験プログラムの準備が大切だろう。

職場体験の教育課程における位置づけ^{※2}

教科の授業で実施 2.0% 総合的な学習の時間で実施 78.2% 特別活動で実施 7.9%

≫ 多くが「総合的な学習の時間」に職場体験を実施しているが、なかには「総合的な学習の時間で実施し、特別活動の学校行事とも読み換えている」8.1%、または「教育課程には位置づけずに実施」3.9%という学校もある

まとめ

≫ 職場体験はほぼすべての中学校で実施されているが、千葉市の実施状況から「建設業」はまだ実施率が低い現状がうかがえる。そのため、体験実施の機会拡大が大切である。また、建設業の職場体験に参加した生徒が、人に話したくなるようなプログラムの実施が重要といえる。

※1 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第一次報告書」(平成25年3月)より引用

※2 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「平成29年度職場体験・インターンシップ実施状況等結果(概要)」より引用

千葉市教育委員会

Chiba City Board of Education

Data

所在地:〒260-8730 千葉県千葉市中央区問屋町1番35号

市教育委員会を中心とした協力体制 県立産業系専門高校や市内企業と中学校を橋渡し

統括指導主事 山田 隆 さん / 主任指導主事 豊川 ますみ さん / 指導主事 鈴木 健一 さん

1. 将来の千葉市を担う人材育成のために - キャリア教育推進連携会議設置 -

千葉市では以前より、将来の千葉市の経済、地域産業を支える人材の育成・確保という観点から、雇用など社会ニーズを踏まえた「キャリア教育」を展開する重要性が議論されていた。そこで平成29年度、「キャリア教育推進連携会議」を設置。小中高等学校の教員、大学や専門学校、市内の企業や千葉労働局など

様々な立場から、将来の千葉市を担う人材育成についての意見を集め、「千葉市のキャリア教育～生涯を通じたキャリア発展の支援に向けて～」としてまとめた。ここでは、発達段階ごとに新たなキャリア教育のあり方や、今後の取り組みの方向性に触れられている。特に中学生というのは、社会情勢についても理解が進む

時期。このタイミングで、個々の興味に応じて個別の職業の実態などについて、最新の情報を得られるような環境を提供する必要が述べられている。

このように、市内の教育関係者のみならず、市民・団体・企業などが共通理解のもとキャリア教育が推進されるような土壌づくりが進んでいる。

■ 千葉市における学科別高等学校進路状況

(上段：人 下段：%)

普通	農業	工業	商業	水産	家庭	看護	理数	体育	英語	国際	福祉	総合	その他
7,167	40	314	331	1	39	14	36	20	34	38	0	26	66
88.2	0.5	3.9	4.1	0.0	0.5	0.2	0.4	0.2	0.4	0.5	0	0.3	0.8

(千葉市教育委員会・平成30年度「進路状況調査」より)

≫88.2%という圧倒的な数が普通科へ進学している千葉市。市内に3つの県立産業系専門高校があることも踏まえ、視野を広げた進路選択ができるよう、千葉市教育委員会としても協力体制の強化を図っている。

■ 発達段階に応じたキャリア教育の必要性



2. 千葉市教員委員会が仲介役として橋渡し

千葉市教育委員会では、中学校の現場で求められる様々なキャリア視点をもった広い視野を育むための取り組みを平成29年度からはじめています。そのひとつは、市内にある県立の産業系専門高校と中学校の橋渡しである。「千葉市内には千葉工業高校・京葉工業高校・千葉商業高校と3つの産業系専門高校があります。中学校から『学校説明をしてほしい』『進路説明会を開いてほしい』など要望があれば、千葉市教育委員会が仲介役となり協力しながら、産業系専門高校3校に教員や生徒の派遣を依頼。学校の概要を説明するような場を設けています。中3生を対象とした進路説明会には、保護者も参加してもらいます」(統括指導主事 山田隆さん)

令和元年度の実施実績は、千葉市内全55校の中学校のうち、15校が教育委員会を經由した説明会開催を希望。

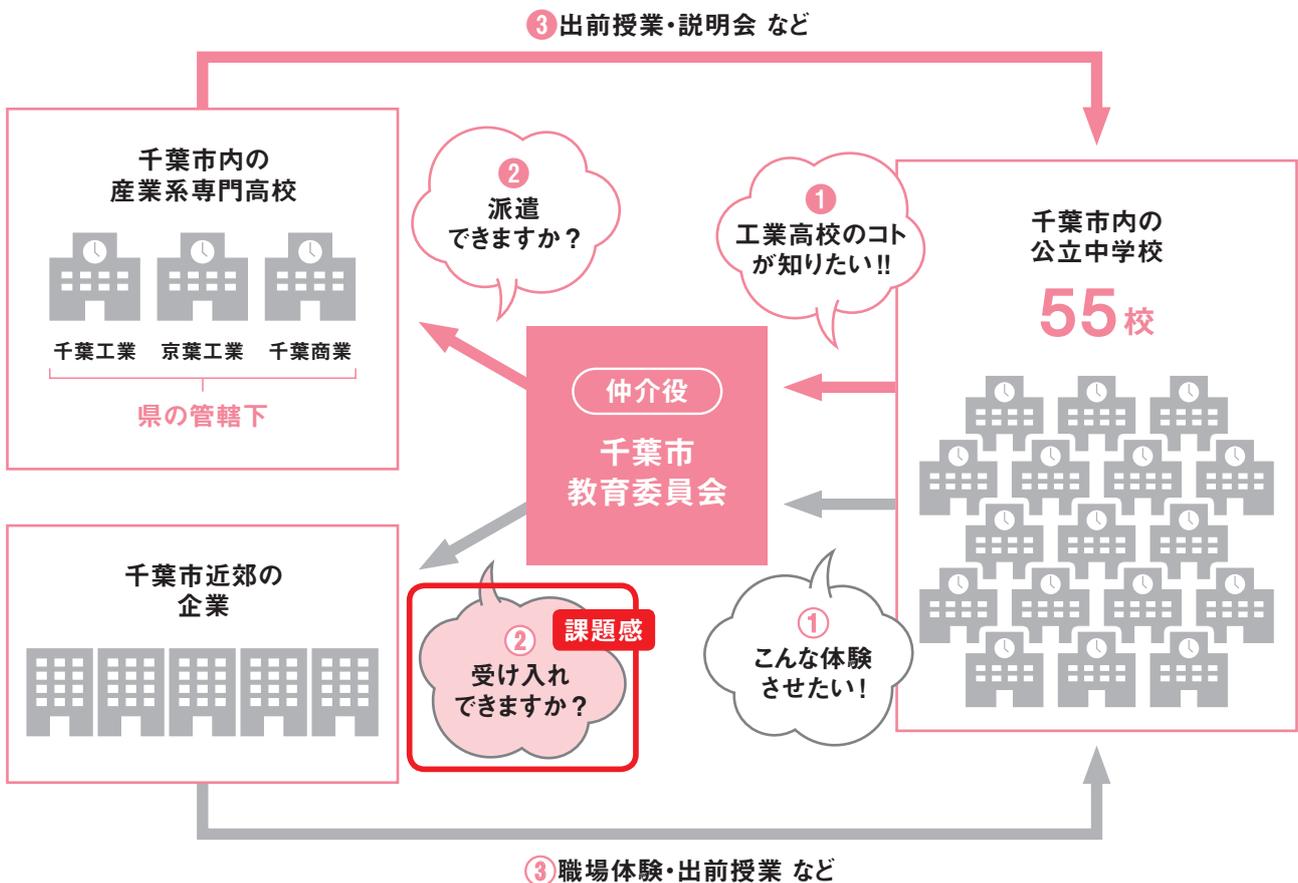
「取り組みをはじめてまだ期間が短いので、データとして成果を示すことは難しい。しかし、実施した中学校からは『工業高校の志願者が増えた』『意識が広がった』などの声をいただいています。試行錯誤ではありますが、生徒の中学校卒業後、そして将来をかけてのキャリアという意味で、視野を広げてほしいと考え、産業系専門高校3校と協力体制を整えています」(主任指導主事 豊川ますみさん)

また、市内企業と中学校とを仲介し、職場体験や出前授業の受け入れ企業探しをすることもある。

「学校や教育委員会から企業に電話をかけ協力依頼をしていますが、なかなか進展しません。例えば建設業団体等に電話をすると、出前授業をしてくれる企業を紹介してもらえるなどすると、大変助かります。キャリア教育に関する講演や実演をして

いただけたら、子どもたちの意識が変わります。家に帰り、保護者と話し、親の意識も変わっていくのです」(指導主事 鈴木健一さん)

普通科に進学する割合が非常に高い千葉市において、専門学科の比率を上げていくことは避けてはならない課題のひとつ。「建設業ではいいお給料がもらえる」、「やりがいのある仕事ができる」、「ものづくりの達成感を得ることができる」などを子どもたちや保護者に示すことができれば、変化が起こるのではないかと期待している。そのためにも、中学校への出前授業や、工業高校や商業高校から中学校への派遣を進めている千葉市教育委員会。「成果が出るのは、子どもたちが大人になり、親となる20年後かなと思っています。その20年後を見据えつつ、今は地道な活動に努めています」と鈴木さんは語る。



千葉市立大椎中学校

Oji Junior High School

School Data

- 所在地:〒267-0066 千葉市緑区あすみが丘8-26
- 創立:1998年
- 校長:今井 功
- 生徒数:1年生164名、2年生147名、3年生142名(2019年5月現在)



職場体験の準備は実施の4～5か月前から開始 必ず要望する体験メニューは「社員インタビュー」

3年学年主任 佐久間 岳 先生 / 木村 将大 先生

職場体験受け入れ事業者の基準

- 1 3日間の受け入れが可能
- 2 16時には解散できるよう終了する
⇒ 職种的な制約はなく、農園などの野外作業も一生懸命に取り組んでいる実績あり

受け入れ事業者探しに必要な情報

- 1 どのような仕事をする職種なのか
- 2 どのような体験内容が可能なのか
- 3 受け入れ可能期間

全国の公立中学校の約98%が実施しているという「職場体験」。教育現場に浸透していることは数字に明らかなが、実際に中学校ではどのように取り入れられているのだろうか。その実態について、千葉市立大椎中学校にヒアリング。キャリア教育の一環として取り組まれる職場体験の運用についてはもちろん、中学生たちの職業観など語っていただいた。

興味や得意を活かした仕事 どれだけあるかを示す大切さ

千葉市56番目の中学校として、平成10年に開校した千葉市立大椎中学校。

「生徒のわからないことをわかるようにする。生徒のできないことをできるようにする。」を学校の使命ととらえ、教員一丸となって教育にあたっている。同校独自の取り組みとして、平成31年度は「学方向上タイム」を設定。朝の20分間を朝読書とドリルの実施にあて、基礎学力の向上を図っている。

一方で、文部科学省が推奨するキャリア教育にも力を入れている。近年のキャリア教育のトレンドとしては、「職場体験」というひとつの方法にこだわらず、理科や数学、英語などといった教科の中に組み込み、多面的かつ自然に行う傾向にある」というのは、3年学年主任の佐久間岳先生。

「職場体験に行く前の1年生で、総合的な学習の時間などを利用し、『職場インタビュー』もしくは『職業調べ』を行っている中学校が多いと思います。やり方は様々ありますが、職場インタビューであれば保護者にインタビューを行うなどしています。職業調べは、インターネットで検索したり、図書館の本で調べたりしています。自分のやりたい職業にこだわらず、いろんな職業をみんなで分担して調べます。調べたことは、学校によりますが大きめの画用紙やスケッチブック、A4サイズ1枚のプリントにまとめ、掲示します」(佐久間先生)

このような職業観を育てるための学習を行うなかで、佐久間先生が大切にして

いるのは、いかに広い視野をもって選択肢を示し、様々な職業があることを生徒に伝えるかということ。

「興味や得意なことが職業に直結するのは難しいようで、1年生の段階で将来の夢を抱いている生徒はそう多くはありません。例えばサッカーが好きな生徒は、サッカー選手になりたいとは思っても、サッカー関連の仕事に就くことは考えていません。しかし、実際に選手になれるのは一握りの人です。中学校では、その選手を取り巻くいろいろな職業を教える必要がある。監督やグラウンド整備など様々なかかわり方があることを、中学生は知りません。そういった情報や選択肢を伝えることが、我々教員の役割だと感じています」(佐久間先生)

この話を参考にとすると、建設業に関しても、小中学生がイメージしやすい“大工”以外にどのような仕事の種類があるのか、丁寧に伝えていく必要があると言えるだろう。

職場体験先の基準は2つ

“3日間受け入れ”と“16時終了”

2年生になると、さらに深く様々な職業に触れていく。それが「職業体験」だ。生徒は先生が用意した“職業体験受け入れ事業者リスト”の中から第5希望まで選

び、3日間の職場体験をする。同校の場合は、美術館や博物館といった公共施設、幼稚園や小学校などの教育機関で職業体験を実施することが多いという。また過去には、先生の人脈を頼り、大工の職場体験を行ったこともある。

「実施時期は学校行事の重なり具合により、毎年変動します。秋に行くこともあれば、夏休みに行くことも。実施のおおよそ4~5か月前には訪問先へのアプローチをはじめ、準備を進めています。受け入れ事業者リストは毎年大規模に変えるのではなく、ベースは前年度分を受け継ぎます。もし、学年によって『こういう職種も選択肢に含みたい』など意図があれば、受け入れ可能な事業者を教員が開拓します。まったく新しいカテゴリーの業種へ電話などで問い合わせをするのは、少し勇気が必要ですが、本校の場合は、企業から郵送される『職場体験をしませんか?』という主旨のチラシを参考にすることもあります」(佐久間先生)

できるだけ多くの職業をピックアップしリスト化したいが、受け入れ事業者の選定に関しては基準が2つあるという。

「1つは“3日間受け入れをお願いできること”。もうひとつは“16時に終了していただくこと”。職業的な決まりはありませんが、日程的制約がどうしても出てきてしまいます。その結果、リストの職種は、例



3年学年主任 佐久間 岳先生

えば老人ホームや学校などに偏りがちです。しかし、そのカテゴリーが少しでも広がることは、生徒たちにとってありがたいことです。もし、我々にPRをしていただく機会があるときには、『何系の職種』であるかを、分かりやすく示していただけると、とても助かります」(木村 将大先生)

“日程の壁”さえ越えることができ、中学生の職場体験が可能になれば、建設業には感じてもらえる魅力がたくさんある。企業単体での受け入れ実施は、日程を考えると確かにハードルが高いかもしれない。しかし、個別企業が“点”として対応するのではなく、建設業団体など“面”としての対応ができれば、職場体験受け入れ事業者リストに建設業が入る可能性が高まるのではないだろうか。

The image shows two hand-drawn posters created by students. The first poster is for 'Builder' (建築家) and includes:

- 仕事内容** (Job Content): 1. 顧客からの依頼を受け、2. 建物の設計図を引く、3. 実際に現場で施工、4. 実際の施工.
- 今後建築家に求められること** (Requirements for future builders): 1. 建築士としての基礎スキル、2. 実務に必要なパソコンスキル、3. 実務に必要なアナログスキル.
- 収入** (Income): 月額15万~70万, 年収300万~900万.
- 働く場所** (Workplace): 工事現場.
- 1日の生活** (Daily Life): A timeline from 5 AM to 11 PM showing activities like waking up, morning prayers, commuting, working, and going home.
- 商 正** (Business Ethics): 1. 美的センスがある人, 2. 理科や数学などが得意な人, 3. 正義感がある人.

 The second poster is for 'Midwife' (助産師) and includes:

- 働く場所** (Workplace): 産院, 看護専門学校, 助産師専門学校.
- 必要資格** (Required Qualifications): 看護師免許, 助産師免許.
- 収入** (Income): 年収500万円, 月給40万円.
- 1日の生活** (Daily Life): A timeline from 7 AM to 7 PM showing activities like waking up, commuting, working, and going home.
- 商 正** (Business Ethics): 1. 人間的なコミュニケーション能力がある人, 2. 責任感が強い人, 3. 誠実な人.

大椎中学校の生徒による「職業調べ」。建築家やケアマネジャー、助産師などを調べた班も

職場体験で実施してほしいのは、社員インタビューと実働的な体験

実際に、中学生の職業体験を受け入れた場合、どのようなことを体験させればいいのだろうか。

「建設業の仕事の場合は、中学生たちが間近で見る機会はとても少ないと思っています。あまり触れたことがない分野だからこそ、見ているだけでも楽しいのではないかと思います。しかし生徒たちは、基本的には手や体を動かすことを好みます。各事業者で事情はあるかとは思いますが、可能な範囲で手や体を動かす仕事を体験させていただいたら、とても魅力的に感じるのではないのでしょうか」(佐久間先生)

また同校では、職業体験実施時に、必ず事業者をお願いしていることがある。「3日間の体験期間の中で、生徒が社員さんにインタビューする時間を設けてくだ

さいとお願いしています。1時間でも2時間でも構いませんし、お昼の時間や片付けの時間などでも差し支えありません。生徒にも『インタビュー内容を必ず考えなさい』と指導しています。インタビューの内容の中に、その仕事のやりがいや職業人の生きがい、生き方に関する質問を入れています」(木村先生)

そうして聞いたこと、体験したことはクラス内発表をしたり、代表生徒が全校集会でパワーポイントを使いながらプレゼンテーションをしたり。実際にその職種に行かなくても、友だちの発表を見ることで「面白そう!」ということが共有される。「建設業であれば、例えば生徒たちが行かせていただいた現場が、何か月後、何年後にできあがるという喜びがあるのかなと思います。『実は建設中のあそこに、行ったんだよ!』など、あとから振り返ることができるのは、面白いと思ってもらえるのではないのでしょうか。例えば幼稚園園舎の建設現場で建設に携わったと



木村 将大先生

いう体験ができれば、「建設業」という仕事と「幼稚園の先生」という仕事に接点があることを知ることができます。生活の中にある建設業の接点を見ることができるのは、面白そうだなと思います。また、建設業に携わる方々がどのような生きがいをもって仕事をされているのかを、中学生が知ることも重要だと思います」(木村先生)



中学生は少し年上の先輩に憧れるもの オープンスクールでは、先輩に憧れを抱くような体験を

中学校での進路指導において、高校などの「オープンスクール」はどの程度重要性を感じているのだろうか。同校では、進路先を選ぶいい機会ととらえ、「公立高校2校、私立高校2校の計4校」への参加を推奨している。

「中学生が高校生と触れあう機会は少ないので、オープンスクールは先輩に会ういい機会です。オープンスクールに行くと、『先輩たちが案内してくれた』という話はよく聞きます。しかし、土日など学校が休みのときに開催するので、実際にどんなことをして、先輩たちはどんなことができるのか目に見えにくい。中学生たちは、ちょっ

と年上の先輩に憧れるものです。建設系だと実習があります。実習をうまく活かせば、『先輩って、あんなことができすぎいい!』と憧れを抱きやすくていいのかなと思います」(木村先生)

一方で、パンフレット等に掲載されている「資格」「就職先」に関する情報は、中学生にとってはややわかりづらい情報かもしれないと木村先生。

「書かれてある資格が、何に使う資格なのかかわからず、どのような職業につながるのか想像が難しいものもあります。教員の立場から言うと、卒業時に資格が取れるのか、それとも受験資格が得られるのかなど

も気になるところです。また就職先も、生徒たちは大手ゼネコンですら知らない状態。企業名とともに、どんな仕事をしているのかなど簡単な説明も書いてあると、より身近に感じてもらえるのではないのでしょうか」(木村先生)

近年では学科の統廃合が進み、学科名も「建築」「土木」ではないところも増えている。また、進学後に2年生からコース選択をする場合もある。資格や就職先などの情報と同様、「どのようなことを学ぶ学科なのか、細かい内容がわかると生徒たちにも伝えやすい」というのは、中学校の進路指導における切実な声だと言えるだろう。

建設業界と教育現場の連携強化 -キャリア教育の多様化が進む今こそできる取り組み-

□ 教員の多様なキャリア教育の視点が、学生と「建設業」をつなげる

現在の教育現場では、「キャリア教育」が広く推進されている。キャリア教育とは、自分の進路を“迷いなく”選択できるよう、職業観や勤労観を養う教育のこと。生徒たちは多様なキャリア教育を通して、世の中にあるあまたの職業を知ることができる。

キャリア教育が推進される今、「建設業」も職業のひとつとして、生徒たちに知ってもらう機会を多く設けることができそうだ。さらに現場見学や職場体験など、生徒の印象に残る体験を行うことができれば、進路の選択が必要なときに、「建設業」を選ぶ生徒が増える可能性が高まる。教育現場の中に建設業の“体験”を組み入れるには、まず“教員”に「建設業」を知ってもらう必要

がある。建設業が社会で担う役割や、日進月歩で技術進化を続けている建設業の今を、教員に知ってもらうことができれば、教員が生徒たちに「建設業」の魅力を伝えることができる。

そこで当財団では、教員免許更新の機会を活用し、教員が建設業に触れることができる「実務施工体験研修」というプログラムを開設。建設業の現状を伝え、実務を経験してもらうことで、教員に「建設業の魅力に気付いてもらうこと」を目的としている。この研修を通して、教員自身が得た知識や建設業に対して抱いた印象、新たな発見などを、キャリア教育や進路指導の場面で生徒たちに伝えてもらえればと考えている。

□ 教員免許更新を機会に、建設業に触れる「実務施工体験研修」

平成21年度に始まった「教員免許更新制」では、小中学校・高等学校の全教員が10年に1度、合計30時間以上の「免許状更新講習」を受講しなければならない。講習は、「必修領域(6時間以上)」「選択必修領域(6時間以上)」「選択領域(18時間以上)」によって構成されている。その中の1つ、「選択領域」の講習として文部科学省の認可を受けたのが、当財団の「実務施工体験研修」だ。

「実務施工体験研修」は、講義や作業体験、訓練に携わる教官や建設企業の実務経験者との交流を通して、建設業界の魅力、および現状と課題を把握してもらうことを目的としている。教員免許更新に活用できる本プログラムは、工業高校の教員だけでなく、小中・普通科教員といった全教員が対象となっている。そ

のため、より幅広い校種の教員に「建設業」に触れてもらうことができる絶好のチャンスであるといえよう。



実務施工体験研修について

参加理由

- 建設現場での実務を経験したいと思ったため (工業高校教諭)
- 今後のキャリア教育に活かせると感じたため (小学校教諭)
- 今までとは違う体験をしたいと思ったため (普通高校教諭)
- 他校種の教員との交流ができるため (工業高校教諭)

実施団体

- 中部 富士教育訓練センター
- 近畿 三田建設技能研修センター
- 九州 福岡県建設専門工事業団体連合会

※詳細は、建設業振興基金のホームページをご覧ください。

建設業への理解を深め、教員が得た“気付き”

研修では、建設業界の現状や課題を学ぶ講義、有識者を交えたグループ討論、実技面では墨出し、鉄筋、型枠施工、解体など、施工の一連の流れを体験する。3日間の研修で、「選択領

域」で指定されている18時間をカバー。建設業の知識を深めることができる内容となっている。

座学 建設業の現状と課題を知る

● グループ討論



● 講義



● 映像講習



教員の 気付き

●講義「建設業の現状と課題」では、企業が求める人物像や工業高校への期待、建設業界の担い手不足への対応について詳しく知ることができた。本校の建設科の進路指導に活用したいと思う。

●講義を通して、高校生が建設系の就職先を希望するよう手立てを、教員側も考えていく必要があるのだと気づいた。

●「映像講習」は、生徒に見せたいと思うほどよくできた映像だった。あへのハルカスや姫路城、スカイツリーなど、有名な建築物の施工技術などを知ることができた。面白いだけでなく、学校でも活用できる内容だった。

●「グループ討論」では「これからの教育の在り方と建設業界への就職について」話し合った。県外や異校種の先生の話聞く機会は少ないので、大変貴重な時間だと感じた。また、住まう空間を学習する「住育」の必要性を実感した。

※研修後に行ったアンケートより一部抜粋

実習 実際の施工体験から、現場の動きや技術を知る

● 鉄筋組立



● 保護具・フルハーネス着用



● フォークリフト操作



● 玉掛け・クレーン操作



● 鉄筋ガス圧接



● 型枠建込



教員の 気付き

●30年ぶりに測量機器を扱い、その仕組みに改めて感動した。足場がどのように固定されているのか知ることができ、それ以来、近所の建設現場を注意深く見るようになった。

●保護具の着用体験では、実験映像を交え落下時の危険性を学ぶことができた。着用が必ずしも安全につながらないということを理解した。実際に着用し、吊り下がり体験ができたことも貴重で、学習指導において生徒にしっかり伝えていきたいと思った。

●学校の授業では、鉄筋の組み立てのみを行っていたが、型枠建込を体験し、型枠で鉄筋の組み立てに善しあしがあることがわかった。

●建設現場は、機械だらけで人肌をまるで感じないと思っていた。しかし、鉄筋組立体験をしたことで「ビルは手づくり」なのだ実感することができた。

※研修後に行ったアンケートより一部抜粋

研修を終えた教員のリアルな声 -「建設業」がキャリア教育にどう浸透していくのか-

「実務施工体験研修」に参加した教員は、どのようなことを学び、その知識を教育現場でどう活用したいと感じたのか。また、建設業界に対して抱いている想いも、リアルな声としてお届けす

る。本プログラムを通して教員が得た視点が、少しでもキャリア教育の充実につながるヒントになることを期待したい。

研修を通して得た新たな視点



「体験」は机上の知識を本物の知識にする

普通科高校教諭

実習体験をふんだんに取り入れたキャリア教育は、文字よりも視覚認知が得意な現代の生徒の興味、関心に訴えかけるところが大きいと感じています。今回の実習を例にとっても、職人の方々の匠な技術には新鮮な感動を覚えました。「机上の知識は、体験や活用を通して初めて本物の知識になる」。このことを、今回の研修を受講して実感することができました。



実務経験者から学ぶ実習指導の視点

工業高校教諭

私は20年間、土木を専門に教えてきましたが、将来同じ道を進もうとしている生徒たちのため、自分自身も技術者のひとりとして学び続けることが大切だと思っています。今回の研修では、現場で活躍する方々の教授の視点が「何が大切で」「何のために」「なぜ必要なのか」非常に明確で、理解しやすかったことが印象的でした。教員として「指導方法の向上」に有意義であったと感じました。



他校種との交流で見えた建設業入職への期待

工業高校教諭

建設業界への入職を促進するためには、建設業の魅力や伝え、若い頃から興味をもってもらう必要があります。今回の研修では、工業高校の教員だけでなく、中学校教員も業界の動向に興味をもち、日ごろの教育活動の中でできることを模索しようとしている姿がとても励みになりました。今後、たくさんの若者が建設業界に入職できるよう、様々な機関と協力していきたいです。

研修で得た視点を教育現場にどう活かす？



研修資料と経験を活かし実習の充実を目指す

工業高校教諭

今回の実習では実際の細やかな留意点や、前後の段取りを予想した効率的な作業の進め方などを再認識することができました。研修でいただいた資料を活用し、生徒に建設業の魅力や伝えていきたいと思えます。そして今後は、今回受講した鉄筋組立や型枠組立体験を、土木実習の中に取り入れていきたいです。そこから生徒たちにもづくりの楽しさを伝えていければと思います。



コンクリートを活用した課題で興味喚起を

普通科高校 非常勤講師

研修を通して、今まで風景の一部としてぼんやりとらえていた「建造物」への興味を、生徒たちに喚起させることができそうだと思いました。授業では、今回の体験を語りながら、コンクリートを活用する課題を取り入れていきたいと考えています。そしてその際には、職人みなさんの手さばきの美しさ、語り口の味わいなども必ず付け加えたいと思います。



進路の選択で大切なのは「自分ゴト化」させること

中学校教諭

生徒は、自分で「見たもの」「知っているもの」でなければ、安心して進路の選択ができないのではないかと考えています。その状況を解決するためには、今回私が体験したような実習や、職場見学の機会を多く設けることが必要不可欠。自分の体験として業界の正しい知識を学び、面白さを知ってもらうことで、少しでも建設業に対する関心をもってくれる生徒を育てていきたいと思えます。

建設業界へのメッセージ



建設業を身近に感じて憧れの職業に

小学校教諭

将来の夢としてサッカー選手や野球選手が人気な理由は、生徒たちの日常に溶け込んでいるからです。建設業界も、生徒たちにとってより身近な存在となれば、人気の職業になるのではないかと考えています。地域に根差した身近な取り組みを推進することで、「僕の街には〇〇工業の職人さんがいる!」と思ってくれるような生徒が育てばいいなと感じています。



「見て学べ」はもう古い繰り返しの指導が大切

工業高校教諭

離職率が高いと言われる建設業ですが、一昔前のように「見て学べ」では、今の世代の生徒はついていけません。何度でも繰り返し指導することで、立派な技術者・技能者に育っていくのだと思っています。また、人間関係の問題も生徒たちにとっては悩みの種。仕事、プライベート関係なく色々な相談に乗っていただければ、生徒たちも安心して働くことができると思っています。



常に進化する建設業の姿を保護者へアピール

工業高校教諭

まず、「建設業の仕事はどのようなものなのか」「どのようなやりがいがあるのか」など、多くの魅力を中学生までの生徒たちに段階的にアピールすることが大切だと思っています。また、保護者に、建設業について正しく理解してもらうことも重要。イベントなどの場で、業界全体でICT化が進み、従来のイメージから変化しているということも、効果的に伝えていくべきだと思います。

中学生と建設業の接点をつくる “魅力発信の場”拡大に向けた提言

建設業の職場体験受け入れを広げるカギは「産官学の連携」

現在、多くの中学校では学習指導要領に基づき職場体験を実施しているが、各中学校では受け入れ先の確保に大変苦労しているという。職場体験先は、担当教員が自ら過去の受入実績や、知り合いのつてを頼って探すことが多い。そのため、受け入れに積極的な小売業や保育園などが、体験先として多く選ばれる傾向がある。

しかし、生徒の将来を考慮すると、職場体験先として様々な業種から選択できることが望ましい。「建設業」も、その選択肢のひとつになることが大切だ。現状、教員にとって、日常的にかかわりが少なく、かつ、体験実績も少ない建設企業に対して受け入れ交渉をするのは非常にハードルが高い。企業側も、受け入れの手順や、その時期に現場があるかわからず、現場見学や職場体験に必

ずしも積極的にかかわっていない。そのような状況から今後、受け入れ先として「建設業」が自然に広がっていくとは考えにくい。

そこで、今回提案したいのが「産官学の連携」による募集である。実際、全国各地でこのような取り組みは始まっており、今回はいくつかの好事例を紹介する。いずれの事例も、新たな業種の体験先を開拓したい中学校、建設業の魅力を中学生に知ってもらいたい建設企業・建設業界、双方にメリットのある取り組みだ。

もちろん職場体験に限らず、企業や中学校が「点」として個々に対応するのではなく、グループや団体に“官”を加えた「面」として対応することで、効果的な取り組みになる例は多いのではないだろうか。連携による取り組みが広がることを期待する。

Case 1 群馬県 -県と協会が連携。「建設業版”職場体験受入リスト”作成-

群馬県では、「建設業の担い手確保・育成」に向けて、建設業に関連する産業界、建設系大学や高校、土木学会などの関係者からなる「産学官連携会議」を設置。課題の共有や、対応策の検討・実施を連携して進めている。職場体験については、学校側から「受け入れ可能な企業が一覧でわかれば連絡が取りやすい」との声があがったことから、県が群馬県建設業協会に協力を仰ぎ、受け入れ可能な建設企業を集めた「職場体験受入リスト」を作成。県内の中学校に配布した(図1)。

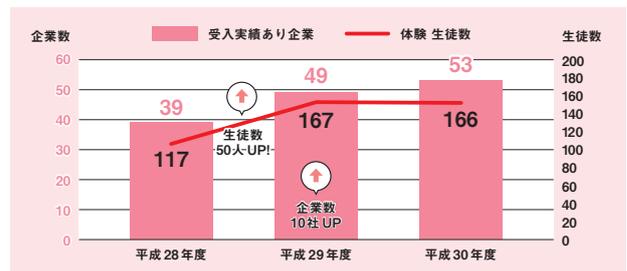
体験可能な企業をリスト化し、一覧で可視化できるようになったことで、生徒たちは訪問先の選択肢を広げることができた。その結果、取り組みを始める前年の平成28年度実績と比較すると、建設業の職場体験に参加した生徒数は50人増加。担い手確保につながるよい機会として、県の業界全体で職場体験の受け入れ強化をした結果、体験を受け入れた建設企業も10社増加している(図2)。連携による取り組みが確実に実を結んでいる成功事例だ。

● 企業一覧リスト 【平成30年度版】中学生職場体験博集受入可能企業一覧(一般社団法人群馬県建設業協会) 158社 (図1)

No	支庁名	企業名	代表者名	〒	住所	電話番号	FAX番号	担当者		会社概要 (わかりやすい会社PRを含む)	体験内容 (具体的な実施内容)	体験学習について		備考
								部署名	氏名			受入可能人数 (目安)	受入可能日数 (目安)	
1	群馬	群馬県建設業協会	小島 隆雄	371-8502	群馬県高崎市高松町1-1-1	0272-221111	0272-221111	総務課	高松 洋平	建設、橋梁、河川、公園など公共施設の建設(主に事務所、倉庫、事務所、住宅など)の建設現場から派遣して、幅広い建設物の建設を行う総合建設業の会社です。	派遣先を使った測量などを行います。	3名	2日	
2	群馬	群馬県建設業協会	高橋 英典	371-8502	群馬県高崎市高松町1-1-1	0272-221111	0272-221111	土木課	宇下 謙	土木・建設工事業	現場見学、作業体験、建設機械の操作等	2名	2日程度	
3	群馬	群馬県建設業協会	高橋 英典	371-8502	群馬県高崎市高松町1-1-1	0272-221111	0272-221111	土木課	高松 洋平	前橋を中心とした土木工事、建設工事の公共工事を60年以上にわたり施工し、皆様の生活環境を快適に出来るよう努めています。	施工現場の見学等	3名	2~3日程度	
4	群馬	群馬県建設業協会	高橋 英典	371-8502	群馬県高崎市高松町1-1-1	0272-221111	0272-221111	総務課	小島 隆雄	一般土木工事、建設工事等を中心に幅広くにわたり41年、社会資本の充実や災害時における生活安全の確保などに積極的に取り組み地域の安全に貢献しています。	①通所に施工した現場見学、②施工中の現場見学 ③企業研修体験、④生コンクリート工場見学、 ⑤測量体験	3名	2日間	
5	群馬	群馬県建設業協会	高橋 英典	371-8502	群馬県高崎市高松町1-1-1	0272-221111	0272-221111	総務課	高松 洋平	群馬の中心、前橋建設業(建設・土木・舗装・リサイクルプラント(太陽光発電)、コンクリート舗装システム(仮設収付工法)、設計事務所等	現場見学、工場見学(遠征測量、リサイクルプラント、太陽光発電)、測量機器の取扱い、設計CAD等	3名程度	3日	
6	群馬	群馬県建設業協会	高橋 英典	371-8502	群馬県高崎市高松町1-1-1	0272-221111	0272-221111	総務課	小島 隆雄	一般土木工事、建設工事、上下水道工事、幹道及びリサイクル材の販売(より安全に、より早く、より安く)	社内受入企業現場見学及び、取引工場見学、 業務の運転体験	3~4名	2~3日	



● 中学生職場体験:建設業の受入企業数と参加生徒数の推移 (図2)



Case 2 徳島県 -教育委員会による、職場体験実施のための支援ツール-

データベース あわ教育サポーター企業等検索サイト 図3



「業種」は建設業を含む、20業種から検索可能。さらに「サポート実施種別」では、職場体験や現場見学、出前授業など企業がサポート可能なプログラムが示されている。

マニュアル「職場体験・インターンシップ」実施の手引 図4



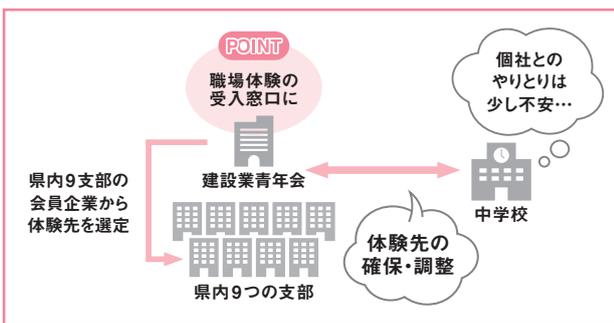
マニュアルは「学校編」と「企業編」の2種作成。「学校編」では、企業へ受け入れ依頼をする際の注意点や、生徒への事前指導などを掲載。「企業編」は、受け入れに関するQ&Aや体験内容のアドバイスなどが掲載されている。

徳島県では、県の教育委員会が主導となり、職場体験やインターンシップに受け入れ可能な企業の情報をまとめた「企業検索サイト」を公開。検索機能が充実しており、業種や地域、対象者などで企業を絞り込むことが可能だ(図3)。また、受け入れ可能人数や期間、体験内容といった情報の記載は、中学校側が希望する条件に適した企業を探す際に参考になる。

さらに同県教育委員会では、『職場体験・インターンシップ実施マニュアル』を県のサイトで公開。「キャリア教育とは何か」といった職場体験を行う意義から、実施の流れ、生徒と接するポイントなど、体験実施のために大切な情報をわかりやすく示している(図4)。このように徳島県は、インターネットを通じて企業と学校に情報を掲示し、職場体験・インターンシップの円滑な実施を推進している。



Case 3 宮城県 -青年会が受け入れの仲介役を担い、マッチングを促進-



宮城県では、宮城県建設業青年会が教育現場と建設企業の仲介役として、職場体験先の調整を行っている。宮城県建設業青年会は、宮城県内9支部の青年会からなる連合組織。仙台市教育委員会の依頼を受け、平成27年度より毎年受け入れ先企業の確保、対応を行っている。

2019年の体験では、仙台市の中学生3名が参加。宮城県建設業青年会の仙台、名巨、塩釜の3支部の協力のもと、3日間で会員企業4社を訪問するプログラムを組んだ。

複数の建設企業で構成された青年会が受け入れ窓口となることで、期間や人数など、学校側の条件に見合った体験先を調整することができる。また、事業内容や企業規模が不明確な個社とのやりとりに不安を感じていた学校側としても、青年会が選んだ企業であれば安心して体験の実施を進められるはずだ。

2019年11月実施の職場体験の様子。東日本大震災の影響で沈下した人工リーフの原状回復を行っている海上土木工事現場の見学など、貴重な体験も含まれていた

まとめ

建設業の魅力を中学生に伝えるためには、どうすべきなのか？中学生のキャリア教育における「職業体験」を活用することが重要なのではないかと仮説を立て、調査を始めました。

今回取材の中で印象的だったのは、職場体験の受け入れをしている建設会社の方に、「工業高校生のインターンシップと違い、種まきの要素が強い中学生の受け入れはハードルを感じるのではないですか？」と質問した際の回答でした。「建設業に興味をもってもらいたいと思い、ずっと取り組んできたことだから、特にハードルは感じません」と、特別なことをしているつもりもないのでと全く抵抗感をもっていない様子でした。「受け入れ現場も天候や時期に応じて可能な範囲で調整することはできる。また、職場体験は社員のモチベーションにつながるメリットのある取り組みだ」という認識であり、建設業界や地元のために楽しんで積極的に実施してきたからこそその回答だと感じました。

アンケート結果や掲載したデータからもわかるように、建設会社の職場体験は他の業種に比べ、まだまだ実施件数が少ないのが現状です。

しかし、今回の紙面でご紹介したように、関係者の連携等が進み、職場体験受け入れのハードルが下がれば、多くの建設会社で職場体験を実施することが可能になると思います。その結果、目的意識をもって工業高校進学を希望する中学生を増やすことにつながるでしょう。

本調査が工業高校と建設業の魅力を中学生に発信する取り組みが広がるきっかけとなり、若年者の建設業への入職促進の一助になれば幸いです。

最後に、本報告書の発行にあたりご協力いただいた教育委員会、中学校、工業高校、建設会社、建設業協会の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。



工業高校・建設会社の取組事例集

～建設業の魅力を中学生に伝えるために～

2020年4月発行

編集・発行 一般財団法人建設業振興基金

〒105-0001

東京都港区虎ノ門4丁目2番12号

虎ノ門4丁目MTビル2号館

試験管理・講習部

TEL：03-5473-1585

編集・ライティング 株式会社 Playce

デザイン 株式会社ラグタイム

一般財団法人
建設業振興基金

